1. 修学旅行で女子風呂覗きを密告したら、美少女 3 人と同じ部屋になった件

「なあ、女子たち、全クラス同時に入るらしいぞ」
「まじか、ってことは博士のプランが通れば……」
「ああ、全員の裸が拝めるってわけだ」
「うひょ〜、そりゃあ楽しみだな」
「だな。うちの女子、人数は少ないけど、代わりにめちゃくちゃレベル高いからな」
「おい、こっちこい！ こっからならバレずに覗けるぞ！」
「まじか！ さすが博士だな！」
「おうよ！ なんてったって先週、この旅館に事前調査に来たからな！ 大浴場の構造はバッチリ把握済みだ！ ここからなら絶対にバレることはない！」
「うおおおっ！！！ さすが博士！ エロにかける情熱がちげぇ！」

修学旅行の夜、大浴場内ではそんな品のない会話が広げられていた。盛り上がっている方を向くと、そこには、「博士」と言われる男子の周りに集まり、女湯との柵の前にたむろするクラスメイト――というか僕以外全員いるのではないか――の姿があった。

正直、ここまでは推測できた。うちの学校というか、このクラスだけかもしれないが、女子に関する想いを変な方向に拗らせた男子が多すぎる。もともと男子校だったのが、昨今の少子化の影響を受け、僕たちの学年から共学になったのだ。そのおかげで 30 人いるクラスのうち、女子はたったの 3 人だけ。学年全体を見ても 20 人ほどしか女子がおらず、そのことが彼らを拗らせた原因の一つだろう。

そして、それに拍車をかけているのが博士の存在である。その口から繰り出される多彩な性知識と圧倒的なカリスマでオタクからヤンキーまで全ての男子から絶大な信頼を置かれている彼がいるのなら、クラスメイトが覗きを行うくらい容易に想像できる。なんてったって女子の盗撮が横行しているクラスなのだ、覗きの一つぐらいするだろう。

「しかし、せっかく安全に覗けるっていうのに、久遠はしないんだよな」
「ああ、あんな男の風上にもおけない奴のことは放っておけ。そんなことより、最終確認をするぞ」
「まっ、それはそうだな。博士が「お話」してくれたって言ってたし、問題はないか」

と、一人で考え事をしていると、男子の一部が僕、久遠悠（くどうゆう）の方を向き、そん

な勝手なことを言ってくる。全く、不能だの枯れてるだのよくも言ってくれたな。だって当然だろう。バレた時のことを考えると、とてもじゃないがやる気にはなれない。

　そりゃあ僕だって健全な高校男子だ。拝めるものならクラスメイトの女子の裸体を拝みたいさ。だが、もし覗きがバレたら、この修学旅行がおじゃんになるだけでなく、ただでさえ少ない女子から「あいつは覗きをした」というレッテルを貼られ、高校生の間ずっと女子から嫌悪の視線を向けられることになるだろう。そうしたら、もう学校生活は終わりだ。色あせた退屈な生活になってしまうのは確実だろう。こんな感じで、その場のノリと今後の高校生活を天秤にかけたら、取るのは当然後者の方だ。

　それに、これは個人的な問題だが、ズルして裸を拝もうという態度が気に食わない。女の裸を拝みたいなら、ヌードが掲載されている雑誌を買うなり、ネットで検索をかければすぐに見つかるだろう。あんな性欲で動いている猿みたいな奴らなら、そんなこと知らないはずがないだろうに。まあ、こんな考えをしているからクラスの男子とはソリが合わず、友達はクラスにあまり居ないのだが、まあそれは別の話だ。

「後は女子が来るのを待つだけだな……」
「女子が入ってくるのは俺たちが入った 15 分後だから……もう少しだな」
「よし、みんな！ 女子の声がしたら黙るんだぞ！」
「おう！」

　直接反論する気になれず、頭の中で論理を組み立てていると、いつの間にか博士が旗頭となって、男子達が妙な結束力を見せ、女湯の覗きに対して全力になっていた。普段は互いに殴り合っているような連中なのに、どうしてこういう時だけ仲良しなのか。
　でも、実を言うと気持ちはわからないでもない。何せうちの学校にはリスクを犯してでも、その裸体を拝みたい女子が 3 人もいるのだから。

「でさ〜、今日ね、アタシの目の前でね、いきなりズルってカトセンのカツラがすっ飛んでったの！　もう見た瞬間笑っちゃって、カトセンにばれてその場ですっごい怒られちゃったわ〜！」
「もう、それは有栖の自業自得でしょ」
「え〜、そりゃないよはーちゃん。だってしょうがないじゃん〜！ いきなりずれたんだよ。一気にズルって！ はーちゃんも見たら絶対笑っちゃうって」
「そういうことを気にしてる人もいるんだから、無闇に笑うものではないのよ」

「まあまあ、有栖ちゃんも遥ちゃんも落ち着いて。言い争いなんてしてないで、お風呂入ろう？」
「それもそうだね〜。てかめっちゃ広いじゃん！ アタシこんなでっかい風呂久しぶり〜！」
「ちょっと有栖、走らないの！」

と、壁の向こう側から楽しく世間話をする声が聞こえてきた。その瞬間、あれだけ騒がしかった男子たちが一斉に口を閉じ、柵に耳を近づけ、その声がする方へ全意識を集中させているようだった。あまりにも全員が同じ格好をしているものだから、おかしくて少し笑ってしまった。けれど、今女湯にいるのが我がクラスが誇る３人の美女なのだから、そうなるのも無理はない。

まずは最初に教員のカツラが取れた話をしていたのが佐藤有栖（さとうありす）さん。肩まで伸ばした髪を金色にして、いつも生活指導の教員から怒られている、いわゆるギャルというやつだ。見た目も文句のつけようがないほど可愛いのだが、男子の人気を集めているのはやはりその距離感である。好奇心がとても高く、気になることはなんでもすぐに知りたい性格のようで、相手の事情お構いなしに質問を繰り出してくることがよくあるのだ。かくいう僕も、読んでいた本についての質問をいきなり食らったことがある。しかも、こちらが思春期の男子であることを知ってか知らずか、平気で身体を密着させてくるので、制服越しでもわかるその大きな胸が当たって、ドギマギした男子は少なくない。もちろん僕も経験済みだ。その日はその感触がずっと背中に残って、何も手がつかなくなるほどだった。

次にその佐藤さんと話していたのが船堀遥（ふなぼりはるか）さん。長い黒髪とキリッとした目が印象的な子である。見た目に違わずとても真面目で、定期テストでは常に学年一位を取り続けている秀才である。実のところ、僕は船堀さんに好意を抱いでいる。その真面目さと、誰かに頼られたら丁寧に対応するその姿勢がとても尊敬できるし、時たま見せる優しい笑顔が普段の印象ととてもギャップがあって、気がついたら恋に落ちていた。だが、彼女には同じクラスに両片思いの状態にある別の男子がおり、彼女と恋人関係になるのは事実上不可能である。この事実を知った時は一晩中泣いた。

そして最後に、その二人の仲裁に入っていたのが宮崎穂乃果（みやざきほのか）さん。短めで茶色がかった黒髪と、その身に纏うほんわかとした雰囲気が特徴的な子である。彼女を端的に表現するなら、男子が「あの子の可愛さを知っているのは僕だけなんだ」と感じるタイプである。誰にも壁を作らず、優しく接している様子は、多くの勘違い男子を生み出しているようだ。実際、うちのクラスの男子の半分くらいは彼女が一番好きだという。僕自身も、彼女と話

す前に船堀さんに惚れていなかったらすぐに落ちていた自信がある。そういう点で、彼女はある意味魔性の女の子と言えるかもしれない。

　3 人の声に続いて他の女子の声も聞こえてくる。やはり、男子のいう通り女子の入浴時間になったらしい。

「ふ〜、極楽極楽〜！ 今日 1 日の疲れが取れてくよ〜」
「ね〜、バスも長かったし、結構身体凝っちゃったよね」
「だねぇ〜、……で・も、ほのっちの身体が凝るのは、こっちにも原因があるでしょ〜？ そりゃっ！ ……おおっ、これはすごい……！」
「っわっ。ちょっ、ちょっと有栖ちゃん。いきなり胸揉むのやめてよ〜」
「穂乃果のいう通りです。有栖、いくら同性だからってそれはやりすぎです！」
「は〜い。は〜ちゃんがそこまでいうならやめま〜す」
「全く、有栖はそういうとこが治ればもっと……」
「なので、次はは〜ちゃんのお胸を揉んじゃいま〜す！」
「ひゃぁっ、ちょっ、いきなり、な、なんてことするのよ！」
「は〜ちゃんはもっと柔らかくなるべきだよ〜。いつもぷんぷん怒ってないでさ、もっとフランクにいこ、フランクに、ねっ？」
「それとこれとは話が別……やぁっ！」
「おおっ……！ これは……！ ほのっちと負けず劣らずのおっぱいですな……！」
「ちょっ、ちょっと有栖、いい加減に……！」
「あっ、ちょっ、手を出すのは反則っ、いてっ、ごめんごめんってば！」

「……なあ、これ、やばいな」
「ああ、正直もう勃起が止まらん。えっちすぎる」
「諸君、まだ早いぞ。我々はこれからその女子の裸体を見るのだ。ここらで満足してたら先が持たんぞ……！」
「っとそうだった。わかったよ博士」
「それでいい。よし、それじゃあ作戦開始だ！」

　博士の合図とともに、一斉に男子が散らばって、大きな足場のようなものを組み始めた。どうやらそれに登って覗きをするようだ。あれだけ大がかりなものを作っているのに音が一切しないところに、ねじれた雄の性欲を感じてドン引きするとともに、若干の感心を抱いた。

　それよりも、先ほどの女子３人の会話。あれの破壊力が凄まじかった。悔しいが、先ほどの彼と同じように僕も勃起してしまった。これはしばらく治らないだろう。十分に温泉は堪能したし、バレないうちにそろそろ上がることにする。

　夢中に覗きの準備をする男子を横目に脱衣所に移動する。部外者の僕のことなど全く気にしてない様子だったので、正直助かった。浴衣に着替えながら、これからどうするかを思案する。素直に覗きのことを密告するのでも良いが、風呂に入る前、博士に『お前が覗きをしないのは勝手だ。しかし、お前も男であるならこのことを他言するなよ。したら、どうなるかわかってるよな』と半分脅しのようなことを言われたのだ。彼のカリスマがあれば、僕を秘密裏に暴行することやいじめにまで発展させるのは容易だろう。そのリスクを犯してまで密告するのは気が引ける。

　かといって、このまま彼女たちの裸体があの猿どもに晒されてしまうのはどこかおかしい気がする。うーむ、どうすれば……。

「おっ、風呂上がりか。どうだ、温泉は満喫できたか？」
「あっ、先生。こんばんは。はい、とても良かったですよ」
「そうか。それはよかった」

　着替え終わり、風呂から出たところでばったり担任の先生と遭遇した。今覗きのことを打ち明けてしまえば、この瞬間は楽になれる。けど、学校に戻ったら地獄が……

「どうした？ せっかくの風呂上がりなのに、そんな思い詰めた顔して。何か悩み事なら話してみろ」
「あっ……その……」
「もしかして、風呂で何かあったのか？」
「えっ、いや、そういうわけじゃ……」
「そうか……わかった。なんかあったらちゃんと言うんだぞ」

　そう言って、立ち去ろうとする先生。ここで言わなかったら確実に言うタイミングがない。どうする、どうする……！

「あの、先生っ……！」

「ん？　どうした？」
「実は……」

―――

「あああああっ、やってしまった……！」
　先生に密告した後、部屋に帰った僕は、そこで一人頭を抱える。勢いで言ってしまったために、後悔の念が時間の経過とともにふつふつと湧き上がってくる。こんなことなら、あのまま言わなければよかった……

　結局あの後、風呂に突撃した先生によって、覗きをしていた連中はみな捕まった。幸い未遂だったらしいが、僕の目測通り、僕以外のクラスメイト全員が関与していたらしい。現在は全員ロビーで正座させられており、事の顛末を教えてくれた担任によると、事を重くみた教師陣の判断によって、明日の朝、全員強制送還されるとの事だ。

　それは置いといて、問題なのは今後の身の振り方だ。博士は比喩抜きで僕以外の男子全員から慕われている。なので、博士が捕まった直接の原因である僕は、そいつら全員から恨みを買うことになってしまった。実際、他クラスの面識が多少あったやつから「許さない」の一言がメッセージで送られてきた。
　これから本当にどうしようか……

（コンコンっ）
「久遠くん、いる？」

　突然の来客にドアを開けると、そこには風呂上がりで髪の濡れた宮崎さん、船堀さん、佐藤さんの３人が、何か言いたげな様子で立っていた。

「えっと……どうしたの？」
「助けてくれてありがとう！」
「先生から覗きを未然に防げたのは貴方のお陰と聞いたわ」
「いや〜、覗かれてたら絶対トラウマものだからさ、本当によくやってくれたよ。ありがとねっ！」

　困惑している僕を見て、3 人はそれぞれ感謝の言葉を伝える。

「いやまあ、僕としても気に食わなかったからさ。当然の事をしたまでだよ」
「それでもだよ！　あのまま覗かれてたらどうなってたことか……」
「あんな奴らに肌を晒すなんて絶対にごめんだわ」
「まっ、そ〜いうわけで、アタシたちは相当感謝してるわけよ。素直に受け取っときなっ！」
「あだっ！」

　照れ隠しでカッコつけてしまったが、向こうは覗かれなかったのが相当嬉しかったようだ。佐藤さんにも謙遜すんなと叩かれてしまった。彼女たちのためになったなら、今後の人間関係を全部犠牲にして、告発した甲斐があるというものだ。

「あ、そうだったわ。久遠君、先生が呼んでいたわ。夕食が終わったら私たち四人で 201 号室まで来て欲しいそうよ」
「ああ、わかった。ありがとう」
「あっ、ちょっと待ってっ！」
「んっ、どうかしたか。……！」

　先生のもとへ行こうとした矢先に呼び止められ、振り向くと同時に頬に何か柔らかいものが当たる。慌てて離れると、そこには頬を少し赤めながら、にんまりと笑みを浮かべている佐藤さんが立っていた。

「これが感謝の気持ちだからっ！」
「それじゃあ、また後で」
「じゃ、じゃあね！」
「あっ、ちょっ」

　こちらの返答を待つことなく、やることは終わったとばかりに 3 人はすぐ向こうへ行ってしまった。やはり、これは、勘違いではなく……。改めて今起こったことを認識し、佐藤さんよろしく顔が赤くなるのを感じる。どうやら火照った体はまだ冷めてくれないらしい。

あれからしばらくして、夕食の時間になった。例の覗きの件で、30 人いたクラスメイトはたったの 4 人になってしまったため、食事をするテーブルが一つしかなく、必然的に彼女らと同卓になってしまった。当然、他のクラスの衆目を集め――男子の視線には恨みと嫉妬がこもっていた――食事に全く集中できなかった。会話もなく、淡々と食べ進める 4 人の姿は、さぞ奇妙に見えただろう。

そんなこんなで何とか夕食の時間を乗り切り、僕たち 4 人は担任の待つ 201 号室に向かった。大方明日以降についての話だろうと思っていたが、実際は予想とは大きく異なることを、そして今後の生活にまで影響を及ぼす重大な出来事のきっかけになることを、この時の僕はまだ知らない。

「えっ！ 先生、どういうことですか！？」
「どうもこうも、言葉の通りだよ。こいつには君たち 3 人と同室になってもらう」

先生からの連絡を聞き、船堀さんが大きな声で疑問を呈す。黙ってはいたが、僕も同じ気持ちだ。僕にはメリットしかないが、そのような自体になった理由がわからず、頭の中はクエスチョンマークでいっぱいである。

「覗きの件を知った旅館の女将さんから、『男子生徒さんには部屋を貸さなくてもいいですよね』と言われてしまってな。まあ覗きをした奴らには、ロビーなり大広間なりを借りて、そこに正座でもさせておけばいいんだが、問題は久遠の処遇だ」
「女将さんに久遠のことを話す前に、部屋を閉められてしまってな。このままだと久遠も覗きをした奴らと同じ扱いをしなくてはならなくなる。そんなのはどう考えてもおかしいから、何とか空いている部屋を探したんだ。教員の部屋も考えたが、どこも定員オーバーで、唯一空きがあったのが、元々4 人部屋に 3 人だったお前たちの部屋だったんだよ」
「事情はわかりましたが、それとこれとは話が違います！ もし私たちに何かあったら……」

船堀さんの意見ももっともだ。彼女たちは今日覗かれそうになっているのだ。異性に対し敏感になるのは至極真っ当な反応だと思う。

「まっ、でも問題ないんじゃね〜？ アタシはそれでいいよ〜」
「ちょっと有栖！ あなたなんてこと……」
「だってさ、久遠ってアタシたちを覗きから守ってくれたんでしょ〜？ そんな人がはーちゃんの言う「何か」なんてしないと思うな〜」
「だけど……」
「遥ちゃん、私も先生の言う事に賛成だよ」
「穂乃果まで……」
「わたしたちのことを覗きから守ってくれたのに、その覗こうとした人たちと同じ扱いなんてかわいそうだよ」

　だが、佐藤さんと宮崎さんは僕のことを相当信頼してくれているようだ。特に反論もなく、僕が部屋に来ることに同意する。仲のいい二人が賛成した事に船堀さんは相当驚いていたが、すぐさま平静を取り戻し、自身の考えを述べた

「……わかったよ。二人がそこまで言うなら私も腹を括るわ。だけど、万が一、何かあったらすぐに先生に通報するからね」
「もちろん。当然だよ。……先生、多大な配慮、ありがとうございます」
「いいってことよ！ 正しいことをした奴が報われないなんてことがあってはならないからな！ あ、後、女子と男子を同じ部屋にするのはバレたら結構まずいから、このことは他言無用な」
「わかりました」

　忠告を聞きながら、直前の先生の言葉に少しジーンときてしまった。僕がしたことを肯定され、頭の中の後悔の念が少し晴れるのを感じる。やはり、先生という人はすごいんだなぁ。言葉のパワーが違う。

「そうそう、ゆ〜くんは間違ったことなんてしてないんだから！」
「ゆ、ゆ〜くん？」
「あれ、ゆ〜くんの名前って悠じゃなかったっけ？」
「いや、あってるけどさ……」
「でしょ〜！ だからゆ〜くん。これからよろしくね！」
「こちらこそよろしく」

　そう言って、佐藤さんは右手を差し出してきた。もちろん、そのまま握り返して握手をする。

見た目通り、快活な性格は見ていてるだけで気分が良くなる。できればさっきのキスの件について聞きたかったが、どうもそういう空気ではなさそうだ。

「……まあ先ほどはああ言ったけれど、貴方のことは信頼してるわ。短い間だけど、よろしくお願いね」
「……うん、こちらこそ」

　船堀さんが言い終わるとぺこりとお辞儀をするので、僕も合わせて礼をし返す。やはり流石というか、こちらが酷く言われたのを気にしている可能性を考慮して、こうやって言葉をかけられる彼女はすごい。すぐに気配りができる彼女の姿を見て、自分の好意を再認識する。

「あはは、なんだか大変な事になっちゃったね」
「確かに。どうしてこんな事になったんだか」
「さっき先生も言ってたけど、久遠くんが正しいことをしたからじゃないかな。私も久遠くんが先生に言ってくれたの知った時、すっごく嬉しかったよ」
「そ、そうかな……」
「そうだよ。それに、久遠くんってあんまり知られてないけどさ、いっつもさりげなく人助けしてるよね。例えばこないだ……」

　変なスイッチが入ったのか、宮崎さんが僕の人助けについて語り始める。船堀さんが止めるまでノンストップで語り続けるものだから、少し恥ずかしくなってきた。
　それにしても、僕の修学旅行は女子３人との同室という漫画みたいな展開になるなんて想像もしていなかった。衝撃的なことだが、これからの旅行のことを考えると胸が弾まずにはいられない。そんなある種の幸せな気持ちを感じながら、先生の部屋を出た。

「おいっす〜。待ってたよ〜。荷物はあっちにおいてね〜。近くの布団がキミのだから」
「あ、ああ、ありがとう」

　荷物を取りに行くために一旦元の部屋に戻った――荷物は部屋の前に置いてあった――あと、改めて彼女たちの部屋にやって来ると、佐藤さんが暖かく出迎えてくれた。普段見ることのな

いラフな格好にどきっとしつつ、指示に従って荷物を置きながら、部屋内を見渡す。僕が先程までいた部屋と間取りは同じではあるが、雰囲気がどこか異なっており、女子の部屋というだけで、こんなに違うものなのかと内心とても驚いた。

「そういや、船堀さんと宮崎さんは？」
「は〜ちゃんは先生のとこいってて、ほのっちは今水買いに行ってるよ。ほのっちはすぐ帰ってくると思うけど……あっ、戻ってきたかも」
「有栖ちゃん、みんなの分買ってきたけど……あっ、久遠くん、いらっしゃい。さっきはごめんね。ちょっと熱くなっちゃったんだ。あっ、よかったらこれ飲む？」
「う、うん。ありがとう。もらうよ」

　宮崎さんが差し出してきた水を受け取る。ひんやりとした感触が気持ちいい。それにしても、宮崎さんに普段の行動をあんなに見られていただなんて思いもしなかった。僕の中では当たり前になっていてなんとも感じないが、人から褒められるのはやはり照れるものだ。

「有栖、穂乃果、点呼行ってきたわよ。……あら久遠君。もう来てたのね」
「どうも、お邪魔してます」
「あら、そんな畏まらなくてもいいのに。貴方が何かしない限りは私も仲良くしたいわ」
「ねぇねぇ、だったらさ、みんな揃ったし、ゆ〜くんと仲良くなる意味も込めて、トランプでもしようよ〜」
「ダメよ、明日も早いんだから。もう寝るわよ」
「え〜、いいじゃんいいじゃん！　まだまだ夜はこれからだよ〜！」
「貴方一番夜弱いのに何言ってるのよ。ほらさっさと布団入る」
「も〜、は〜ちゃんのケチ〜」

　二人の話を聞いて時計を見ると、あと５分で就寝時間というところだった。一旦そういうことを意識すると、どうにも眠くなってくる。見ると宮崎さんはすでに布団に入ってスマホを見ていた。そういうことなら僕もそうさせてもらおう。

「あ〜！　ゆ〜くんも寝ちゃうの〜？」
「ほら、久遠君も寝るんだから、有栖も寝ましょう」
「ぶ〜！　……もう、わかったよ〜。今日は寝る。けど、明日は遊ぶからね！」
「はいはい」

　佐藤さんと船堀さんの方も話がついたみたいだし、僕も本格的に寝るとしよう。布団を肩まで掛け、目を閉じていると、部屋の誰かが電気を消したみたいで一気に視界が暗くなる。今日はいろいろあったし、かなり疲れた。これならすぐ眠れそうだ。

　シコシコ……シコシコ……

「こんなので本当に気持ちいいのかな？」
「大丈夫だって。こうすると男の人は気持ちいいってネットに書いてあったから」

　ん……？ なんだか下半身がやけに涼しいような……それに、ずっごく気持ちいい……え、気持ちいい？
　寝ている時、感じることのない感情を抱き、下半身の方に目をやる。するとそこには僕のペニスを握って、上下にしごく宮崎さんの姿と、それを見る佐藤さんの姿があった。

「えっ！？ 二人とも何して……」
「しっ！ おっきな声出さないで！ は〜ちゃん起きちゃうから！」

　驚く僕の口を佐藤さんが指で塞ぐ。辺りを確認すると、船堀さんは綺麗な寝息を立てて寝ていた。起きていないことを確認した佐藤さんは、潜めた声で語り始めた。

「これはね、今日のお礼なの」
「お、お礼？」
「そっ、覗きから守ってくれたゆ〜くんにどうやったらお礼できるかって、ほのっちと二人で考えてさ、それで夜這いしにきたわけ」
「だからって、こんなこと、好きでもない人に……」
「アタシもほのっちも、ゆ〜くんのこと好きだよ。もちろん恋愛的な意味でね」
「えっ！？」

　突然の告白に頭がくらくらする。宮崎さんに関してはもしかしたらと考えていたが、まさか佐藤さんまでそうだったとは。

「そうだよ。ずっと久遠くんのこと好きだったんだからね。そうでもなきゃ、熱く語れるくらい君のこと見てないよ」
「そ〜そ〜、君のことはほのっちからずっと聞いてて、『いい奴なんだな〜』ぐらいには思ってたけど、今日のやつで、一気に惚れちゃった。顔も悪くないしね。というか、そもそも好きじゃなかったらキスなんてしないでしょ」
「だからね、久遠くんにはこのまま夜這いを受け入れてほしいな〜なんて思ってたりして」
「けど……」
「『据え膳食らわぬは男の恥』だよ。それに、久遠くんは勇気を出してこんなことしてる女の子を否定するようなかっこ悪い奴なの？」
「……わかったよ」

二人の熱烈なお願いに遂に屈してしまった。正直な話、部屋の一件を聞いた時にこういう展開になってほしいとは頭の片隅で思ったが、まさか本当になるとは。こんなのエロ漫画の世界じゃないか。現実味の無さに浸る僕をよそに、二人はいそいそと動き始めた。

じゃあ、私たちがたっくさん気持ちよくしてあげるからね〜♥ ほのっち、さっき言った通りにね。

うん、わかったよ。……それじゃあ久遠くん、横、失礼するね♡

にしし〜♥ アタシも反対側に失礼して、っと、これで準備は完了だね♥

それじゃあ、始めていくね♡ 最初は有栖ちゃんの手コキだよ♡ 有栖ちゃん、まだ経験はないけどお兄ちゃんが隠し持ってるエロ本とかでたくさん勉強したんだって♡

こうやって、指で輪っかを作って……この出っ張ってる部分を擦ると、気持ちいいんだよね〜♥ ほらほら、気持ちいいですか〜♥ どこか痒いとこはないですか〜♥ ははっ、なんてね♥

ふ〜っ♡ もう、いくら有栖ちゃんの手コキが気持ちいいからって、わたしのこと忘れないで

よね♡ 今、ちんちんにだけ意識向けてたでしょ♡ そんな悪い子には、えいっ♡ もっと抱きついちゃうよ♡

　ははっ、ほのっちがおっぱい押しつけられた瞬間にめちゃくちゃビクッとした♥ ほのっちのおっぱい、もちもちで気持ちいいでしょ〜♥ ほのっちってね、めちゃくちゃ肌ケアしっかりしてるから、触り心地も最高なんだよ〜♥

　ほら、触って……♡ ひゃんっ♡ も、もう、触り方えっちすぎだよ〜♡ 私は逃げないから……やんっ♡

　アタシのも揉んでいいよ〜♥ ほのっちのみたいな柔らかさはないけど、その分ハリがあるし、何よりほのっちのよりおっきいからね〜♥ 揉み心地は負けてないはずだよ♥

　そうなんだよね♡ わたしもさっき教えてもらったんだけど、私のが 86 センチの F カップなんだけど、有栖ちゃんのおっぱい、いったいいくつだと思う？♡

　ちょっと耳貸してね♥ アタシの胸のサイズは……

　94 センチの G カップ、だよ♥

　どうかな。驚いた？♥ あはっ、ゆ〜くんってば、目がエロオヤジみたいにギラギラしてるよ♥ 街中でアタシたちをよく見てくるおじさんたちとおんなじ目になってる♥ きゃ〜、怖〜い♥ 襲われちゃう〜♥

　襲われてるのは久遠くんだけどね♡ うわ〜、脇から手回して、横から揉みしだいてる……どう、有栖ちゃんのおっぱい、気持ちいいかな？ ♡

　ほのっち、この表情を見れば一目瞭然じゃない？ 気持ちよくなってない人がこんな幸せそうな顔しないって♥

　それもそうだよね♡ 有栖ちゃんのおっぱい、ほんとおっきいよね♡ 久遠くんの手からはみ出しちゃってるよ♡ 有栖ちゃんのおっぱい、学年で一番おっきいんだよ♡ さっきお風呂で見た時に他の女の子と見比べたけど、有栖ちゃんよりおっきい子はいなかったな♡

　そういうほのっちも、学年だとかなり大きい方だよね♥ だって、風呂にぷかぷか浮いてたくらいもん♥

　ちょっと、それ恥ずかしかったんから言わないでって言ったじゃん♡

　え〜、でもゆ〜くんには大好評みたいだよ♥ ほら、見てよ♥ ここ、さっきよりもバキバキになってる♥ おっぱい押し当てた時くらいからどんどん硬くなってて、ほのっちのおっぱいが浮かんだ話をした時に、鉄みたいに硬くなったんだよ♥

　ほんとに？ それならいいけど……♡ それよりさ、久遠くん、なんだか辛そうだよ♡

　あっ、もしかして、もう我慢できないんじゃない？♥ さっきから腰がヘコヘコしちゃっているし♥ でもしょうがないよね♥ 学校で一番おっきいおっぱいと二番目におっきいおっぱい、両手で揉み比べしてるんだもん♥ そりゃあ、我慢できなくなっちゃうよね♥

　そうだよ♡ 我慢しなくていいからね♡ 好きなタイミングでぴゅっぴゅしちゃおうね♡ ちゃんと気持ちよく射精できるように、わたしも手伝ってあげるよ♡

　あ〜、ほのっちもしごくのいいね〜♥ 恋人繋ぎで快感は二倍かな♥ 即席の手オナホに射精しちゃおうね♥

　ほら、ちんちんしごかれながら、わたしたちのおっぱいの話を聞いて溜め込んだ精液、ぜ〜んぶ吐き出しちゃお♡ はい、ど〜ぞ♡

　びゅるるるっ♡ どっぴゅるるるっ♡

　うわ……すっごいね♥ ドクドクしてるのがこっちに伝わってくるよ♥

　最後までちゃんと吐き出すまで、シコシコ続けてあげるからね♡

……よし、全部出し切れたかな♥ 射精お疲れ様♥ 最後にお掃除してあげるからね〜♥ あ〜む♥ じゅむっ♥ じゅるるるるる……っ♥ じゅぱっ♥ はい綺麗になったよ♥

うんうん、勢いのあるすっごくかっこいい射精だったよ♡ さ、次は何しようか……あっ。

ん〜、どうしたのほのっち、って、げっ。

穂乃果、有栖。久遠君の布団でいったい何をしているのですか？

2.彼女の裏人格とえっちする話

私、諸星香澄！ 大学2年生です！ 今日は最近出来た同じ大学の彼氏の家で初めてのおうちデートの日！ 今日のために家で料理の練習したり、一緒に見たい映画を選んだりしたの。あとはもしものことを考えて、勝負下着も買っちゃった！ 恥ずかしい話、私としては彼とセックスをしたいんだけど、初めてのお家デートだし、彼もそういうことが好きなタイプじゃないから、正直あんまり期待はしてないけどね。私にとって初めての彼氏だし、こんな性欲強いのバレちゃったら引かれちゃうかもしれないから、私から誘うのはなしにしないと……

そんなこと考えてたら、いつの間にか集合場所まで着いちゃった。ってまだ30分前じゃん！ どんだけ楽しみにしてたのさ私！ ま、まあ早く着くことに悪いことはないから……って誰に言い訳してるんだろ。あはは……

そういや彼、一人暮らしって言ってたけど、どんな部屋なんだろう？ やっぱりえっちな本とかその辺に置いてあるのかな？ でも、最近は電子書籍化されてるって話も聞くしどうなんだろう？ というかそもそも彼がえっちな本持ってたらそれはそれで驚きだけどさ。まあともかく、初めてのお家デート、楽しみだなぁ〜！

お邪魔しま〜す！ うわ〜ちゃんとしてる〜。全然散らかってないし、私の部屋とは大違いだよ！ こんな部屋にはエロ本とかなさそうだね！……え、何その反応。まさか本当にあるの？ この部屋に？ てか、君そういうの持ってたんだ。ちょっと驚いたな。やっぱり普段すました顔してるけど、君もちゃんと男の子なんだね。……ああ、別に怒ってなんてないよ。男性がそうい

うことに興味を持つのは当然だし、なんなら私も……い、いや、なんでもない……。

　ああ、そうだ！ 私、晩ご飯作るよ！ 材料も持ってきたからキッチン借りていい？ おっけ〜、それじゃあ、パパッと作っちゃうから、君はそこで待ってて！ 私の料理、美味しいって家族からも褒められるんだ！ 楽しみにしててね！

　お粗末様でした。 たくさん作りすぎちゃったって思ったけど、全然そんなことなかったね。美味しく出来てたかな？ ……やった！ 練習の甲斐があったよ！ あっ……えへへ。バレちゃった……。

　ご、ごほんっ！ でさ、この後どうする？ 私、見たい映画持ってきたからさ、一緒に見ようよ！ ……その点はご安心を。ちゃんと君の好きなやつにしたからさ。ちょっと失礼するね……よし、これでおっけい！ ささ、一緒に見よう！

　う、うぅ〜〜！ まさか最後、ジュリアンがあんなことになるなんて……。私、涙が止まらないよ……。 うわっ、な、慰めてくれるの……？ ありがとう……。 君の胸の中、すっごい落ち着く……。
　この後お風呂入るつもりだったんだけど、しばらくは入れそうにないから先入ってきていいよ。なんなら一緒に入る？ ……なんてね、冗談だよ。もしかして本気にした？ まだ早いって言ったのは君じゃんか。その辺はちゃんと弁えてるよ。私も落ち着いてきたからさ、お風呂行ってきなよ。

ふぃ〜、 さっぱりした〜！ お風呂めっちゃ広いんだね。足までしっかり伸ばせてすっごいよかったよ！ あっ……ふふっ、目そらしてどうしたのかな〜♡ もしかして、えっちな妄想しちゃったのかな〜♡……なんてね、普通彼女の風呂上り姿なんて見たらドキドキしちゃうよね♡ しょうがないよ♡

さてと、あとはもう寝るだけかな？ 私、君と一緒のベッドで寝たいな〜なんて思ってたり……え、いいの！？ てっきり断られるかと……未婚の女性には手を出さないとか言ってた君が同衾を許すなんて、明日は雪かな……。
ああ、すねないですねないで！ ちょっとからかっただけじゃん。ほんとはすごく嬉しいよ！ そうと決まればさっさとベッド行こう！ これはもしかすると、もしかするかもしれないよ……

う、嘘でしょ……。寝つきが良い方だとは言ってたけど、まさか一瞬話すのをやめた途端に寝るとは……。まあ私としては貴重な寝顔拝見タイムなんだけどね……。
御顔失礼しま〜す……うわっ、かわいい！ いつもはキリッとしててかっこいい感じだけど、寝るとこんなに可愛くなるんだ……！ これは保存案件だね……！ パシャリっと……明日はこれでからかっちゃお……。どんな反応が見れるか楽しみだな。

ふぁぁ〜、寝顔見てたら私も眠くなってきた……明日早起きして、朝ごはん作って驚かせるためにも、もう寝ちゃおう。おやすみなさい。

これを……して……うわ……勃……てる……やる気……じゃねぇか……わざわざ……なさそうだ。

ん？ ああ、起きたか。おはよう、よく眠れたか？

何してって、そりゃあ男と女が同じベッドで寝たらすることなんて一つだろ。セックスだよ、

セックス。それの準備だよ。

　お前は誰だって？ おいおい、質問の多い男は嫌われるぜ？ まあ無理もないか、アタシはお前の可愛い可愛い彼女の香澄さんだよ。雰囲気が違う？ そりゃ当然だろ。だって今のアタシは人格が違うからな。

　アタシは表の人格がためにため込んだ性欲が爆発して出来たモンなんだ。そもそも、表の方は元来性欲が強くてな。それに性的好奇心も強いときた。いわゆる典型的なむっつりスケベなんだよ。

　今まではムラムラ〜っとしてきたらオナニーでちゃんと解消できてたんだが、彼氏のお前ができてからはお前とのセックスのことで頭がいっぱいになっててよ。満足に発散することが出来てなかったんだ。

　それでも表は、お前がそういうエロいことにあんまり興味がない淡白なやつだって知ってたから、我慢しようとしてたんだぜ？ それなのにお前はなんだ？ お家デートに誘うわ、ハグに風呂上りの姿を晒すわ、挙げ句の果てには同衾だぁ？ それでいてお前からは一切手を出さないとは何事だよ！？ 表はもう今までないくらいにムラムラしてたぞ！ 表の人格がそれとなく誘ってたのに、お前はそれに一切気づかずさっさと寝るとか、お前本当に男か？

　いや、これは言い過ぎだな。お前だってムラついてるのは知ってるんだ。さっきまで、ココ、バッキバキにしながら寝言で「香澄……！ 香澄……！」って言いながら腰動いていたぜ。隣に本人がいるのに夢の中ではこいつとずっこんばっこんしてたのか？ ははっ、怒るな怒るな。

　とまあそんなわけで、思いっきりムラついてるが自分から手を出せない腰抜けの表の人格に変わって、こうして代わりにアタシが出てきてやったというわけだ。ちょうど都合よく表が寝てくれたから助かったぜ。こいつが寝てる時にしかアタシは出てこれないからな。

　それにお前にとってもちょうどよかったんじゃないか？ こんなにおっ勃たせて、どうせ彼女が来るとかの理由で今日ヌイてないんだろ？ ここらで一発、しっぽりとすれば、アタシもお前もスッキリ出来て一石二鳥じゃねえか。せっかくのお家デートだぜ、これくらい楽しまないとな。

よし、夜も短いしさっさと始めるか。……あ？ この後に及んでまだなんかあんのか？ ゴム？ そんなの必要ねぇよ♡ なんだって今日は安全日だからな♡ それに彼氏なら「孕んだら責任をとる」の一言ぐらい堂々と言ったらどうだ？♡ ま、大学生には厳しいか♡ それに快楽が欲しいだけのアタシには関係ないがな♡

ほら、見てみろよ。アタシのパンツにでっけぇシミが出来てんぞ♡ お前から同衾の誘いをもらった瞬間からお前に抱かれるかもしれないって考えて、ずっと濡れっぱなしだったんだぞ♡ こちとらもう準備万端なんだ♡ 据え膳食わぬはなんとやらというだろ？♡ アタシの彼氏ならかっこいいところ見せてみろよ♡

おっ、やればできるじゃんか♡ それで、彼女を押し倒した後はどうするんだ？♡ ガチガチに勃起したそのデカマラ、アタシの準備万端びしょ濡れ処女おまんこにずぶぶ〜っ♡って挿入したら絶対気持ちいいぞ♡ 遠慮するなよ♡ 大学生のカップルならこういうこと普通にやってるぞ♡ それに人格変わってるとはいえ正真正銘お前の彼女のおまんこだから、浮気にはならないって♡

あっ、それとももしかしてお前ってこういう経験がない童貞なのか？♡ あははっ、その反応を見るに図星だな♡ お前って本当わかりやすいな♡ じゃあさ、記念すべき童貞卒業えっち、彼女の新品処女おまんこで済ませちゃいな♡

ん？ ああ、そうだぞ♡ この身体もお前と同じ、未経験の処女だ♡ 今までに誰も使ったことのない新品だぞ♡ アタシたちはお互い未経験のカップルだったってことだな♡ 驚いたか？♡ ははっ、チンポビクつかせて反応すんなし♡ ほらっ、マンコ広げといてやるからさっさと入れな♡

んっ♡ そうだ、ゆっくりゆっくり腰を突き出して……よし、全部入ったな♡ これでお前も童貞卒業だ♡ ああそうだ、途中でぷちっ♡って音がしただろ♡ あれがアタシの処女膜が破れた音だ♡ どうだ？ 自分の童貞卒業と彼女の処女を奪うのを同時に成し遂げた感想は？♡ この世のどんなヤリチンだってやったことのない大偉業だぜ♡ そんな顔してないで、もっと嬉しそうな顔をしろよ♡

何……？ 「もう射精しそう」……？♡ はぁ……せっかく最高の卒業えっちにしてやろうと思ったのにもう限界なのか？♡ まあ仕方ないか♡ 童貞くんには処女おまんこのキツい締め付

けは刺激が強かったよな♡ いいぜ、射精しても♡ その代わり、ナカで全部出し切るまできゅ〜♡って膣締めて、一滴残らず搾り取ってやるから覚悟しろよ♡ やめてったって聞かないからな♡

おっ、そうこうしてるうちに堪えるのにも限界がきたみたいだな♡ ヘコヘコ腰振りすら無くなってるぞ♡ それにナカでチンポも膨らんできてるし、本当に我慢できなさそうだ♡ そら、一回スッキリしときな♡ おらっ♡ 締め付け強くしてやるっ♡

びゅるっ♡♡ びゅくびゅくびゅく♡ びゅるるっ♡

お〜、でてる♡でてる♡ 子宮にどんどん注がれてるのを感じるぞ……♡ まだビクビクしてるし……♡ んっ……♡ あっつ……♡ そらっ、まだ出せるだろ♡ おらっ、もっとだせっ♡

よし、落ち着いたかな♡ ……ふぅ、中出しされる感覚ってのはこういう感じなんだな♡ それにしてもよくでてたな♡ アタシも軽くイッちまったよ♡ まさかこの身体がここまでチョロマンだったとは思ってなかったぜ♡

ん？ おいおい、何満足そうにして寝ようとしてるんだよ♡ まだ終わりじゃねぇぞ♡ アタシはまだまだ全然欲求不満だよ♡ そらっ、さっさと勃たせ直して二回戦行くぞ♡

3. イケメンデカパイ同級生女子に彼女の性体験を聞かされた後、美味しくいただかれる話

「あの！ 離してください！」

街を歩いていると、突然女性の大きな声が聞こえてくる。音のした方に顔を向けると、そこには、数人の男性に囲まれている一人の女性の姿が見えた。それに、あまり良い雰囲気では nなさそうだ。様子から察するに厄介なナンパにでも捕まったのだろう。助けに入るために様子を伺っていると、絡まれている女性が自分の知り合いであることに気がついた。

虎谷薫（とらたにかおる）。僕が所属している学校の演劇部の主演俳優で、その辺の男性アイドルよりも綺麗でかっこいい顔立ちと男子の平均よりもずっと高い身長、それらとは不釣り合

いに思えるほどの抜群のプロポーション。さらに劇中で見せる観客を飲み込むような演技力、そして、その口から放たれる甘い台詞で学校中の男女の注目を独り占めする学校の人気者だ。彼女が出演する劇の時にはそうではない時に比べて少なく見積もっても 3 倍は観客が増えるという噂もある。

　それに、彼女が入部してからというものの、その姿を近くで見たい女子の入部希望者が圧倒的に増える事態に発展した。僕の代の入部希望者が僕、天城京介（あまぎきょうすけ）と彼女の二人だけで、一時は廃部の危機に陥っていたが、彼女のおかげでなんとか回避できたと部長も喜んでいた。
　僕は彼女と同学年同クラスということで、他の人たちよりかは多少交流があると考えられているのか、彼女のことについていろいろ聞かれたりすることもある。というより、それ目当てで話しかけてくる人がめちゃくちゃ多い。正直、そういう人たちに辟易としているのはここだけの話だ。
　だからと言って、彼女のことを助けない道理にはならない。そう思って、彼女の方へ足を踏み出そうとしたとき、件の彼女の方から声がした。

「すみませんっ！ 連れが来たので失礼しますね！」
「あっ、ちょっと！」

　彼女はそのまま包囲網から抜け出し、僕の方へ近寄ると、そのまま僕の腕に抱きついた。そんなことをされると自動的に彼女の大きな胸が僕の二の腕でむにゅんと潰れ、彼女の人気の一因であるそのスタイルの良さを存分に体感することとなる。その柔らかい感触と、彼女から漂う女の子特有のいい香りに思わず顔を赤くしてしまう。そんな意識外からの破廉恥な攻撃に戸惑っていると、仕掛けてきた張本人が口を開く。

「ごめんなさいね。この人が私の彼氏なんです。そういうわけなので諦めてもらえませんか？」

　彼女は謝るような仕草をしながら、ナンパをしていた彼らに言うと、ナンパの人たちも「しゃ〜ねぇか〜」と諦めたような口ぶりで、向こうへ歩いて行ってしまった。
　鮮やかなナンパ撃退に感心していると、一息つく彼女に声を掛けられた。

「いや、すまないね天城君。突然、利用するようなことをしてしまって。さっきからしつこくてさ」
「あ、ああ、それは別にいいんだけど、よく僕がいるって気づいたね」

「まあね、こう見えて視野の広さには自信があるんだ。それに、部活で唯一の大切な同期をこの私が見間違えるなんてことがあるわけないだろう？」
「あはは……」

　自信に満ち溢れていて、それでいてかなりクサいセリフをこんなに堂々と言えるのは流石虎谷さんだと思ったが、返事に困って苦笑いを返してしまった。

「あと、良かったらなんだけど、このあと一緒にご飯でもどうかな？ 実は遊ぶ約束をしていた子にドタキャンされてしまってね。それにさっきのお礼もしたいんだ。どうかな？」
「う、うん。いいよ」
「やったっ！ 君とは一度じっくり喋ってみたかったんだよ！ それじゃあ、行こうか！」

　なんと、まさかのご飯のお誘いだった。それに虎谷さんが僕との会話を望んでくれていたという事実に、なんだか嬉しさを感じる。僕はそんなことを感じながら、今にもスキップしそうなほど機嫌が良さそうな虎谷さんの後を追いかけた。

「いや〜、食べた食べた。結構なボリュームだったね」
「うん、そうだね」

　場所はとあるファミレス。今は二人とも食べ終わって、食後のコーヒーを飲みながら、そろそろ退店するかどうかを考える段階にある。
　食事中はいろいろな話をした。部活のこと、お互いのこと、勉強のこと。そんな会話の中で改めて虎谷さんはとても感じの良い人だということをひしひしと感じた。よく笑うし、こちらの話を面白そうにしっかりと聞いてくれる。だから、こちらとしても話していて楽しい気分になってくる。取り止めのない話がこんなに楽しいと感じるのは久しぶりだった。できるならこのまま終わりたくないくらいだ。

「ん〜？ どうかしたかい？ 私の顔に何かついてる？」
「あっいや、なんでもない！」
「私としては、別に見惚れててもいいんだよ？ でも、そんなに隙ばかりだと食べちゃうぞ♡」

「うぁ……！」

　そう言って、彼女は僕に向けて微笑みを向ける。口元は可愛らしいけど、目元は肉食獣のようにギラついている。そんなある種の危なさを含んだイケメンスマイルを急に向けないで欲しい。笑いには攻撃の側面があるとは言うが、顔が良すぎる人の笑顔は殺傷能力を持っていることを自覚してくれないと、向けられる側の心臓がもたない。

「ふふっ、なんてね。まさか、本当にとって食うつもりじゃないさ。ただの冗談だよ」
「冗談には全く聞こえなかったよ……」
「ははっ、驚かせてしまったかな？ ……さて、そろそろお腹の調子も落ち着いただろう。出ようか」
「そうだね。いくらだったっけ」
「ああ、会計はもう済ませたよ」
「えっ、そんなの悪いよ。自分の分は自分で……」
「いいんだ。この食事は私のお礼なんだ。きちんとおごられてくれ。それとも君はお礼の気持ちを蔑ろにするようなやつなのかい？」
「う……」

　確かにそういう言われ方をすると、なんだか僕が悪いことをしているような気分になる。だけど、やっぱり申し訳ない気持ちになってしまう……

「そんな顔しないでくれよ。これは私がしたくてしたことなんだ。もし、それでも悪いと思うならこの後も少し付き合ってくれる？ それでチャラってことにできないかな？」
「ま、まあそれなら全然……」
「よし、それならこの話は終わり。それじゃあ店出ようか」

「私、あっちの方に欲しい本あるから。終わったら連絡するよ」
「うん、わかった」

　現在地は先ほどのレストランから少し行ったところの本屋。本人が言っていたように、欲し

い本があるとのことだ。

　それにしても、ここに来るまでそれほど長い距離を歩いたわけではないのだが、やはり虎谷さんの魅力というのは凄まじいものだということを改めて見せつけられた。反対方向から歩いてくる人は皆こちらに注目の視線を向けるし、中には振り返ってまで虎谷さんのことを見てくる人もいた。

　それに、「この後付き合って欲しい」と言われた時は時には何も思わなかったが、レストランを出た辺りでふと気が付いた。

　これってデートなのでは？

　そう認識した瞬間、心の奥底からこみ上げてきたのは嬉しさではなく、とある噂だった。無論、こんな美人と一緒に街を歩く事ができると言うのは、それだけでも相当嬉しい事ではあるが、この虎谷薫という人物にはある奇妙な噂があった。その噂というのは、彼女が実は誰とでも肉体関係を持つ、いわゆるヤリマンなのではないかというものだ。なんでも、「狙われた人は男女問わず襲われる」だとか、「迫られたら受け身になるしかない」など、根も葉もないことが学校中でまことしやかに囁かれている。もちろん、噂でしかないので真偽のほどは全くわからないのだが……

「ん〜、ぼーっとしているようだけど、大丈夫？」
「うわっ、びっくりした！」

　一人で思考を巡らせていると、背中側から声をかけられた。

「あっ、もしかして、これが欲しいのかな？」

　そう言って彼女が手に取ったものは、僕の目の前の棚に平積みされていた、キャラクターの肌の露出が多く、少し過激な表紙のライトノベル。その表紙に限らず中身も読み手の想像を掻き立てるような内容で、「こんなエロいのアニメ化不可能だろ www」と SNS の書き込みで見かけた事がある。

「うわ、見てよこの表紙。女の子乳首が見えそうになってるよ……こういうえっちなの、好きなんだ。あの真面目な天城君もちゃんと男の子なんだな♡」

「あっ、いや、その……」
「ちょっと意外だったなぁ。『付き合ったら優しくしてくれそうな男子ランキング』の一位の天城君がこんなむっつりスケベだなんて、学校の女の子が聞いたらどう思うだろうね？」
「えっ、あの……」
「ふふっ♡ でもしょうがないよね、天城君も男の子だし。こういうのに興味は持っちゃうか。……あっ、そうだ。そんなむっつりの天城君はさ、こんな 15 禁レベルの優しいやつじゃなくて、ネットの奥底にしかないようなもっと生々しくてえっちな体験談、聞きたくない？♡」
「は……？」

　こちらを揶揄うようなセリフにたじろいでいると、向こうからとんでもないセリフが飛び出した。思考の整理が追いつかない。彼女の言った言葉の意味が理解できない。
　そんな困惑する僕を見て、彼女はただ、妖しく微笑んでいた。

「ふふっ、着いたよ♡」
「えっと……」
「見てわかるだろう？♡ ラブホテルだよラブホテル。大人の男女が深い関係を結ぶために利用する場所さ」

　本屋で衝撃的な宣言をされ、こちらの返答も待たずそのままの勢いで連れてこられたのは、ピンク色の案内板が輝くラブホテルだった。僕もうら若き高校生だ。この場所がどんなことをするために存在しているかくらいは知っている。それより疑問なのは、どうしてここに連れてこられたかというホワイの部分だ。

「体験談を話すと言ったが、内容が内容だからね。まさか、そこらのカフェテリアで話すわけにはいかないだろう？ そういう話をするのにふさわしい場所がここというわけさ♡」

　虎谷さんは目をキラキラさせながら僕に語りかける。確かに理屈は通っている。通ってはいるが、彼女は僕とそういう関係だと思われてもいいのだろうか。先ほども述べたが、彼女は学校でも随一の人気者だ。こんな場所に、それも男と二人でいるところを万が一誰かに見られたりしたら……

「ああ、もしかして、私のことを心配してくれているのかい？ それ自体はすごくありがたいことだけど、問題はないよ。何度もここを利用しているからね。君も私の噂くらい聞いたことあるだろう？ ……さっ、行くよ。こんなところで立ちっぱなしなのもあれだからね」

　まるでこちらの心象を読み取ったかのように、的確な回答をくれる。その中には聞き逃せない事があったような気がしたが、それを指摘するより早く、虎谷さんは僕の腰を抱き寄せた。瞬間、思考をしていた回路が吹き飛び、何も考えられなくなってしまう。そんな僕の様子を見て、虎谷さんはにんまりと笑みを浮かべながら、ラブホテルの入り口へと向かっていった。

　慣れた手つきで部屋を選び、そのままエレベーターホールへと向かう。その間もずっと虎谷さんと身体が密着したままであったため、服越しでも十分にわかる女体の気持ちよさに、ただでさえ頭がどうにかなりそうなところへ、さらに今自分が置かれている状況も合わさり、僕は身体をまともに動かすことすらできないほどの興奮と不安に襲われていた。

「ふふ、緊張しているのかな？ 身体が強張っているように見えるよ。そんな大丈夫さ、別に何もしないから。ただ話を聞かせるだけだよ。それとも、何かあるのを期待してしまったかな♡」
「なっ……！」
「んふふっ、図星だったかな♡ 別に天城君さえ良かったら、してもいいんだよ？」
「いや……いいよ……そういうのはもっと関係を深めてから……が、いいな」
「……！ へぇ〜、しっかりしているんだね。私が関わってきた人たちはみんな本能でものを考えているような人たちばかりだったよ♡ 例えば……あそこの彼らみたいにね♡」

　そう言って、虎谷さんが指を向けた先に居たのは、舌同士を絡め合うディープキスをしながら、互いの胸や尻を触り合っているカップルの姿だった。外見から推測するに、僕らと同じ年代ぐらいだろうか。

「すごいね。周囲の人目を気にしない乳繰り合いながらのキス♡ きっと、部屋に着く頃には二人とも理性がぶっ飛ぶ寸前になって、きっとお互いの身体を貪り合う動物みたいなセックスをしちゃうんだ♡」

「……！」
「おや……♡ 顔真っ赤になっているよ♡ やっぱり初めてだとそうなるよね。けど、慣れておいた方がいいかもね♡ ああいうの、ここだと日常茶飯事だからさ♡」

　彼らのこれからを妄想した内容を、ハスキーボイスで耳の中に直接流し込まれて、なんの反応も起こさない方が無理な話だろう。それに、虎谷さんが僕の二の腕や脇腹、足の付け根の中をさわさわと触ってくるのも、僕の反応に拍車をかけていた。

「ふふっ、必死に耐えてて、すっごく可愛い……♡ まだまだこれからなのに、もうこんな調子じゃ、最後まで我慢できないかもね♡ ……おっ、エレベーターが来たみたいだよ。それじゃあ、行こうか♡」

「さあ、到着だ♡ ここまで来るのに、随分と時間がかかってしまったな♡ 少し疲れてしまったよ♡ そらっ」

　部屋に着くや否や、虎谷さんはすぐさまベッドに飛び込んだ。彼女が着地すると同時にベッドの軋む音が聞こえてくる。そんな楽しげな様子とは対称的に、僕はただ入り口で茫然と立ち尽くしていた。先程のエレベーターホールでの出来事や、成り行きではあったが、あの虎谷さんとラブホテルの一室に二人でいるという今までの人生で体験したことのない現実が脳の処理能力の限界を越えてしまっている。

「ほらっ、天城君もそんなところに立ってないでこっちに来なよ♡ ふかふかで気持ちいいぞ♡」

　そんなまともに頭の働いていない状態であるから、街頭に吸い寄せられる蛾のように虎谷さんの声のする方へ自然と足が動いてしまう。ふらふらとおぼつかない足取りではあったが、なんとかたどり着く事ができた。ベッドの際に着くと、そのまま虎谷さんに抱き留められ、彼女の股の間に身体を移される。彼女と僕の身長差は頭一個分ほどあるので、彼女の身体にすっぽりと全身を包まれるような形になった。

「ふふっ、ぼぅっとしちゃってるけど大丈夫？♡ ここは君にとって刺激が強い場所だったか

な？♡」
「あ……はい……」
「いいよ。話は天城君が落ち着いてからもできるからね。まずは調子を整えようか」

　頭の上から虎谷さんが僕のことを心配する声が聞こえる。だが、本心ではそんなことを微塵も思っていないのだろうと容易に推測できる。なぜならば、上下左右から虎谷さんの香りが漂っており、背中には彼女の豊満な双丘が押し付けられている。下半身に目を向けると太ももには虎谷さんの手が置かれており、逃げ出そうにも逃げ出せない雰囲気を演出するのに一役買っていた。彼女が自身の身体で作り出した天然の牢獄に、こちらの興奮は最高潮を迎えているのだ。こんな状況で落ち着くなんて事ができるはずがあろうか。

　一周回って妙に冷静になった頭を使って状況把握に努めていると、突然、彼女の手が僕の股へ向かって動き始めた。指を立ててなぞるような移動の仕方に、たまらず声が漏れ出てしまう。

「……ぁっ！」
「おや……♡ 天城君、どうしたんだい？♡」
「て……手が……！」
「おいおい、少し動かしただけじゃないか。それだけなのにそんな反応するなんて、君はどこまで可愛い存在なんだい？♡」

　こちらの反応に、虎谷さんはスイッチが入ってしまったらしい。僕のことをまるで気にしない様子で、まるで舞台で喋るように言葉を続ける。

「ああ、今すぐ食べてしまいたいくらいだ！♡ このまま衣服を全て剥ぎ取って貪る事ができたらどれだけ幸せだろうか！♡」
「と、虎谷さん……？」
「……ああっ、すまない。自分の世界に入ってしまっていた。危うく目的を忘れるところだったよ」
「んんっ、よし、それじゃあ本題へ移ろうか。これはついこの間のことなんだけどね……」

天城君も知っていると思うけど、私のことを好きだと言ってくれる人は男女問わずかなりの人数がいるんだ。しかも、その中の大多数が性別問わず恋愛感情を持っている事が多くてね。毎日下駄箱には大量に手紙が入っているし、告白のために呼び出されるなんてことは日常茶飯事さ。

もちろん、そういうのも大切な私のファンの声だ。蔑ろにするなんてことはしてはならないから、こちらもそれなりの対応を返すのだけれど、私も人間だからさ、ストレスというのはお構いなしに溜まっていくものなんだ。

だから、定期的に発散させているのだけれど、天城君は私がどんなことをしてストレス発散をしていると思う？

……正解はね、誰かをこうやってラブホテルに連れ込んで、満足するまでぶち犯すんだ♡

君もなんとなく察しているかな。このホテルはその時によく利用していてね。中学の頃からとてもお世話になっているんだ。

最近まで学園祭のための練習で忙しかっただろう？ それでかなり疲れが溜まっていたんだ。どこかで憂さ晴らしをしないとなあと思っていたんだが、そんな時に、いつものように呼び出しをくらってね。呼ばれた場所に行ったら、待っていたのは男子バスケ部の先輩だったんだ。

まあ、いつも通り断ろうと思っていたんだけど、その先輩の告白を聞いていたら向こうはなかなかに最低な発言をたくさんしてきたんだ。やれ「俺とセックスしてヨガらなかった女はいない」だの「お前もヤッてやるから彼女になれ」だの、まあよくもそんなこと言えるなと思うようなことばかり言っていてね、ちょっと頭に来たんだ。

だから、表面上はその告白を受けたように見せかけて、そのままこのホテルまで連れ込んだんだ。その先輩はかなりウェイ系の……こういうの DQN って言うんだっけか。まあいいや、チャラチャラしている感じに違わず、私が手続きをしている時も特に気にすることなく、ずっと鼻の下を伸ばしていたし、彼女だからと隙あらば遠慮なしに胸とかお尻とかも揉んでいたん

だ。そんな態度にムカついて、引っ叩いてやろうかとも思ったけど、なんとか堪えて、部屋に到着したんだ。

　部屋に着いたら、その先輩がいきなり私のことを押し倒して、興奮しきった目を向けながら「セックスしろ」って言ってきたんだ。ほんとありえないよね。前戯もなしに本番がしたいって、頭パッパラパーのお猿さんかなと思ったのだけど、あえて従ったフリをして、させてあげたんだよ。

　許可を出したら、先輩が目に見えて喜んだ顔になっちゃってさ、思わず吹き出しそうになったよ。他の女の子との経験があるんじゃなかったのかって思っちゃってね。それともあの虎谷薫とセックスできるってことがそんなに嬉しいことなのかなとか考えながら様子を伺っていると、先輩は私の制服を乱雑に剥いで、スキンも付けずにそのまま私のおマンコに挿入して、腰振りを始めたんだ。

　そうしたらまあ、セックスの下手なこと。こっちの気持ちよさなんて全く考えてないのが丸分かりの独りよがりセックスだったんだよ。ただ膣内に自分のチンポを挿入して腰を振って射精を目指すだけ。情緒もへったくれもありゃしない。

　それなのに先輩ったら、「俺のちんこはすごいだろう！」とか「どうだっ！ もっと声出してもいいんだぞ！」とかダメな男のテンプレみたいなセリフを吐いててね、もう完全に萎えちゃったんだ。

　だから、そのまま先輩を押し返して攻守交代。今度は私が上に跨って、本当のセックスってやつを教えてあげたんだ。最初のうちはいろいろ言って抵抗していたけど、私がちょっとナカを締めて、チンポを刺激してあげるだけでまともに喋れなくなっちゃった。

　先輩はセックスは下手くそだけど、ディルドとしての役目はしっかりと果たしてくれたんだ。豹変した私に対して恐怖心はあるはずだろうに、それでもチンポはしっかりと勃起したままでさ、私も何度かイけたし、ある程度は満足できたんだ。

　でもね、先輩は私の本気オナニーセックスが気持ちよすぎて、女の子みたいな情けない喘ぎ声を上げるだけのおもちゃになっちゃったんだ。当然、我慢なんて出来ずにそのままあっけなく射精してたよ。じゅぽんっ♡とおマンコからチンポを引き抜いて、ちょっと休憩しようと思っていたら、先輩は息も絶え絶えになりながらも、なんだか幸せそうな表情をしてたんだ。

　でも、少し理不尽かもしれないけど、その顔が無性にムカついてね。その時の心情を言葉にすると「こっちは全く気持ちよくなかったのに、なに一人だけ気持ちよくなってんだ」って感じかな。

　だから、そのまま先輩の後ろに回って、足で身体を固定しながら、射精直後で敏感なチンポを握ったんだ。「射精したばかりだから今触るのはやめてくれ！」みたいなこと言ってた気がするけど、そんなことはお構いなしにしごいてあげたんだ。

　その時は、ただしごくんじゃなくて、ふぅ〜♡って耳に息を吹きかけてあげたり……胸板に指を這わせて、乳首を服の上からカリカリ擦ったり、指で摘んでくりくりいじめてあげたりしたよ。ちょうど今、君にしてあげているのと同じようにね。

　そこからはもうすごかったよ。乳首いじるのと同じペースでチンポをしごいたり、チンポの先っぽの部分だけを責めてあげたりしたらさ、先輩ってばすっかり大人しくなっちゃってね。ただただ気持ちよさそうにしてただけだったよ。

　まあでも、それじゃあ私の腹の虫が収まらないから、亀頭責めを激しくしたり、吐いていたタイツを使って何度も潮吹きさせたりしたけどね。体感したことのない感覚に絶叫しながら潮を撒き散らす先輩、すっごく滑稽で面白かったよ。動画撮っていたら君にも見せてあげられたんだけどね。その時は楽しくなっちゃってて忘れてたんだ。

　そのあとは、射精したら次の射精するまでひたすらいじめ続ける、そうして射精したらもう一回っていうの退室時間まで延々と繰り返したんだ。私の腕の中でいいように射精するだけの機械になってた先輩、惨めで可愛かったなぁ。

　結局、その日は 15 回の射精と 4 回の潮吹きしたあたりで解放してあげたんだ。でも、去り際に捨て台詞みたいなのを吐いていたから、その場に組み伏せて「お前は私に性行為でも暴力でも勝てないただの雑魚なんだよ。それがわかったなら私に二度と関わるな」って耳元で言ってやったんだ。そうしたら、腰をガクガクさせながら、慌ててドアから出て行ったよ。

　そして、これはそのあと聞いた話なのだけど、その先輩、私にめちゃくちゃにされたのが相当効いてしまったらしくてね。今まで関係を持っていた女の子とえっちじゃ満足できなくなったみたいなんだ。噂だと自分のことを徹底的にいじめてくれる女の子を探しているだとかなん

とか。どうやら先輩の性癖をねじ曲げてしまったようだ。

　おや……♡ ふふっ、君はこういう話が好みだったのかな？♡ 股間のところが大きく膨らんでいるぞ♡ ああ、隠さなくていい。君の身体を触りながらそういう話をしたのはこちらの方だ。そうなるのも無理はないさ。

　けれど、少しもどかしいのではないかな？ 「あと一押しあればすごく気持ちよくなれる」……君の状態としてはこんな感じだろうか。もし、今ここで君が「先輩にしたことと同じことをしてくれ」と言ってくれたら、喜んでしてあげるのにな♡

　……ふうん、まだ我慢できる、と。わかった、私も無理やりするのはあまり好きではないからね。君がしないというなら手は一切出さないと誓おう。その代わり、次は今の先輩の話とは少し毛色の違う話をしてあげようじゃないか♡ 休むなら今の内だよ。

4.サブスクリプション・ガールフレンド

　突然だが、皆さんは昨今何かと耳にすることが多いであろうサブスクリプションというものはご存知だろうか。英語では「定期購読」の意味を持ち、現代ではサブスクと略され、「料金を支払うことで、製品やサービスを一定期間利用することができる形式のビジネスモデル」という意味を持つ。例を挙げると、映画やアニメの見放題プランや音楽の配信などが有名である。
　しかし、このようなサービスを利用するのはその性質上、大学生以上の大人の人たちだと思っていた。そう、今日、幼馴染に呼び出されて話をされるまでは。

「ねえ、彩人。ボクね、『ボクの彼氏になれる権利』を売ろうと思っているんだ」
「……は？」

　突然のことで反応が一拍遅れてしまった。なんてことをこいつは言うのだ。自分が恋人になる権利を他人に売る？ 意味がわからない。戸惑いを隠せない俺を他所目に、にししと笑う幼馴染、金路寺紬（きんろじつむぎ）は話を続ける。

「いやね、ちょっと最近彩人とするゲームだったり、ラケット用のガットを買ってたりしたらお金がなくなっちゃってさ。かと言ってウチの学校ってバイト禁止じゃん？ だから、どうやってお金を稼ごうかと思ったときにふと思いつんたんだよ。私の恋人の権利を売ればいいってね」

そう言って、どうだっ！と言わんばかりにドヤ顔をする紬。少し冷静になった頭で考えると、確かに合理的な話だと感じる。贔屓目に見ても、紬は可愛い。首あたりにまで伸ばした茶色がかった黒髪に、化粧をしていなくてもテレビでみるようなアイドルや女優などでは逆立ちしても全く勝てないと思えるほど整った顔立ちがよく映えている。

実際に彼女が街中で何度も芸能スカウトに合う姿を目撃しているし、彼女の所属している軟式テニス部は、俺らが一年の時、彼女が所属するという情報が出回っただけで、その年の志願者が例年の 5 倍になった伝説を残しているくらいだ。

さらに、性格面も完璧で、誰とでも壁を作らずフレンドリーに接していて友達も多く、持っている趣味もアニメからスポーツまで高校生が話題にあげるものは一通り理解できる幅広さを持っている。

そんな彼女にしたら町中に吹聴してしまいたくなるぐらい完璧な女子の彼氏に、お金さえ払えばなれると言ったのなら、この学校にいる男子であれば確かに大枚を叩くだろうと言う確信が持てるほどの女の子なのだ、この金路寺紬という幼馴染は。

「あっ、でもボクなんかの彼氏になりたい男子なんていないか」
「いや、それはない。いつも言っているだろ、お前はその気になればこの学校に男どもの死骸を築けるだけの力持っていると」
「だから彩人はいつも盛りすぎなんだって。それに、そう言っても具体的にどうなのかは全然教えてくれないじゃんか」
「うっ、それは……確かに、そうだけど……」

痛いところを突かれてしまった。けれど、それを答えるわけにはいかないのだ。例え、いくら証拠があったとしてもだ。

その話をする前に、紬の魅力についてもう少し話をしよう。紬が素晴らしい顔立ちをしているのは先程も話したが、そのプロポーションも彼女に惹きつけられる要因となっている。これは彼女のお母さんが話しているのを聞いてしまったものなのだが、彼女は食べたものが全て胸にいってしまうタイプらしいのだ。その話が真実だと裏付けるかのように、今面前でドヤ顔をする紬の胸部のボタンは左右に引っ張られ、今にも弾けそうになっている。

しかも、彼女は運動部である。この二つの事実が組み合わさるとどうなるか、勘の良い人な

らわかるだろう。それはもうすごく揺れるのだ。それも、多少衣擦れが起こる程度の小さい振幅ではなく、漫画ならばるんばるんと言ったような効果音が書き文字で書いてありそうなくらい大きく揺れるので、紬が運動している姿を見てしまった男子はそれから１週間は彼女の乳揺れで頭がいっぱいになり、他のことが全く手につかなくなるという噂が立つくらいだ。
　と、話を戻そう。ここまで散々述べてきたように、紬の男子人気はそれはもう凄まじく、紬のことを盗撮した写真や動画が男子間でやり取りされるくらいである。そういった物品を彼女に見せれば、俺が言っていることにも説得力が出るだろうが、流石にこんな男子の闇の部分は見せられない。

「ん、んんっ。と、とにかく、理屈はわかった。確かに紬がいう方法ならお金は稼げるだろう」
「ふふ〜ん、すごいでしょ。思いついた時は天才かと思ったよ。サブスク形式にして月額 1000 円から始めようと思ってるんだ」
「安っ！」
「え？」

　金路寺紬の彼氏に月 1000 円払えば成れると聞いたら、全財産をつぎ込むやつが何人出てくるだろうか。彼女が今言っていることは、一旦契約を勝ち取ってしまえば、月々の微々たる出費でこの世で最も幸せな立場を手に入れることと同義である。やはりこの幼馴染は自分の価値を分かっていないようだ。本当に盗撮写真やらを見せてやろうか……？

「いや、なんでもない。それより紬、その方法には問題が山積みだ」
「え〜、なんでさ！ 完璧な計画だと思うんだけどな〜」
「まず一つ目の問題は、さっきも言ったように、そんなものを売ったら、その権利をかけて男子の間で血みどろの争いが起こる。おそらく数週間は結果がつかないだろう。その間はもちろん無収益だ」
「ほんとにそんなことが起こるのかな〜？」
「まあ、これは最悪信じてもらえなくていい。それよりも大事なのは二つ目の問題だ。紬、そっちの想定だと、何人と契約するつもりだった？」
「そりゃもちろん一人だけど……」
「だよな。けど、その契約した奴がいいやつとは限らないぞ。お金を必ず払うかなんて保証はどこにもないし、勘違いした奴が出てくるかもしれない。最悪の場合、暴力を用いられて、紬が酷い目に合うかもしれない」
「う〜ん、確かに……」

　こちらの話が終わると、紬は顎に指を添え考え込むジェスチャーをする。よかった、これで説得できるなら、三つ目の理由を話さなくてもすみそうだ。

「じゃあさ、この権利、彩人が買ってよ」
「は！？」
「だって、『ボクの彼氏になる権利』を売るって話をしたのはまだ彩人だけだし、彩人がさっき言ってたような酷い事するやつじゃないってことはもう十分に知ってるからさ。ほら、条件二つともクリアしちゃった」
「ぐっ……い、いや、俺がその権利を買うメリットはどこにある？」
「えっ、だって彩人がこのサブスクを拒む理由って、ボクが自分の知らない男とそういう関係になるのが嫌だからじゃないの？」
「……」

　なんと、俺の浅ましい独占欲は彼女に筒抜けだったようだ。そう、これこそが隠していた三つ目の理由、「紬が知らない男と恋人関係になるのが許せない」というものだ。紬と幼い頃からずっと一緒に生活してきた俺は、いつしか彼女の存在が自分の中でかけがえのないものになっていた。そのことに気がついたのは、初めて彼女の盗撮写真を見てしまった時だったか。まるでお宝を拾ったかのように紬が着替えている写真を見せつけてくるクラスメイトに反吐が出そうになり、危うく手を出しそうになったのを覚えている。
もちろん今回の紬の提案を否定し続けたのもそれが最大の理由だ。

「えっ、もしかして図星だった？ 結構当てずっぽうだったんだけど……」
「……ああ、そうだよっ！ 悪いかっ！」
「ふ、ふ〜ん……そうなんだ……」

　しかも、カマをかけられていた。今の俺、惨めすぎないか……というかどさくさに紛れて、結構なことを言ってしまったのでは……？

「あ、いやっ、ちが……」
「へぇ……、『違う』、ねぇ……じゃあ、今からクラスでこの話、提案してくるね」
「はっ、それは話が……！」
「でも、さっきのが『違う』ってことは、ボクが他の男と恋人関係になってもいいってことでしょ？ 何にも問題ないじゃん」
「くっ……」

「ほらほら、ボクの足がどんどん教室に向かっちゃうよ〜。今契約すればボクの彼氏になれるし、ボクが他の人と付き合うこともなくなるんだよ。さあ、どうするの？」
「分かったよ……！ 払えばいいんだろっ、払えばっ！」
「ふふっ、毎度あり〜！ これで契約成立だねっ！ じゃあ、これからよろしくね、ボクの『彼氏』くん？」

　そこからの生活は大変だった。まず、紬からのスキンシップが多くなった。これ自体は前々から幼馴染だと言うことを差し引いても結構な頻度であったが、それが明確に増えたと感じるくらいには多くなった。
　具体例を一つ挙げると、教室で座っているとあすなろ抱きの要領で抱きついてくるのだ。何か前段階があるわけでもなく、いきなりぎゅむ〜と抱きついてくるのである。当然そんなことをされたら、俺の背中に紬の大きな胸が潰れるように押し付けられるのである。
　彼女の顔が自分の顔のすぐ横にあることも合わさって、理性が音を立ててガラガラと崩れ去る音が聞こえてきた。こちらも抱きつかれるたびになんとか振り解いているが、正直毎日ギリギリの戦いを強いられていた。
　それに、大変なのはそれだけではなかった。というのも、その様子を見ていたクラスメイトからの視線が非常に辛いのである。紬が少し動いて、身体が密着するたびに俺に向けられる視線の圧が強まって、俺が少しでも触ろうものなら「お前を殺す」と言わんばかりに圧が増すのだ。
　こうなってしまうと教室の居心地が最悪なので、契約を結んだ日以降、授業中以外では屋上に避難することになってしまった。正直な話、紬のスキンシップはこちらとしても嬉しいものではあるが、流石に恥ずかしいし、一人になりたいという気持ちがあったので屋上という場所があったのは都合が良かった。

　都合が良かったはずだったのだが……

「あ〜っ！ いたいた！ も〜、探したんだよ〜！」
「紬……どうしてここに……」

　ある日のお昼休み、一人で昼食を取ろうと屋上の床に座り込むと、聞き馴染みのある声が聞こえてきた。振り返って見ると、頬を膨らませ、いかにも「怒ってます」という表情をしている紬が立っていた。

「どうして、じゃないよ！ ボクは彩人の『彼女』なんだ！ ご飯は一緒に食べるのが普通じゃないかな？」
「それには一理あるとは思うが、それを考慮してもお前のスキンシップが激しすぎて、教室の居心地が悪いんだよ。というか、外面的には俺とお前が付き合ってること、言ってないだろ」
「あっ、そうかも」
「やっぱりな。まあ、でも言ったところであんまり変わらないと思うけどな」

　紬がやってきた理由を片付け、これでまたゆっくりできると思い、購買で買った焼きそばパンにかじりつく。うん、やっぱりうまい。

「ちょっとちょっと！ 何一人で食べ始めてるのさ！」
「ん？ ああ、悪い。終わったかと思ったからさ」
「そうじゃなくて！ ボクも一緒に食べる！」

　そう言って、紬は俺の隣にどかっと座りこむ。持っていたバックをがさごそとあさり、取り出したのは布に包まれた直方体の物体だった。

「紬、それは何だ？」
「なんだと思う？ ヒントは恋人といえば、だよ」
「う〜ん……あっ、弁当か！」
「正解っ！」

　俺の答えに、紬は指で丸印を作って答えが正しいことを告げる。どんなものであれ、問題に正解できるのは嬉しいものだ。
　しかし、紬の弁当か……ヒントに提示されたものが恋人だと言うことから、おそらく中身は手作りだろう。そうなると、中身にとても興味が引かれる。
　紬の手料理は身内贔屓を抜きにしても本当に美味しい。以前食べさせてもらった時に、その

余りの美味しさから、「俺のために毎日作ってくれないか」と言ってしまったほどである。

「ねえねえ、彩人。これ、分けてあげようか」
「ぜひ頼む」
「うおっ、すごい食い気味だね……まあ、顔からして、わかってたことだけど……はい、それじゃあ、あ〜ん」
「あ、あ〜ん？」
「ボクたち『恋人』だし、これくらいはオプションには含まないからさ。ほら、口開けて」
「わ、わかった」

　彼女に促されて、大きく口を開ける。そこに放り込まれたのは少し小ぶりな唐揚げだった。噛んで味わうと、下味の焼肉のタレの味と鶏肉がよく馴染んでおり、とても美味しい。

「ふふっ、その顔を見るに好みに合ったみたいだね」
「ああ、やっぱりお前の手料理は最高だ」
「ありがと。まだあるから良かったら食べてよ」
「マジか！　助かる」

　そうして、二人だけの食事はつつがなく続いた。紬の料理はどれも絶品で、思わず泣きそうになってしまうくらいだった。そんな様子を紬は嬉しそうにニコニコしながら、見守っており、ちょっとだけ恥ずかしかったのはここだけの話だ。

「あっ、そうだ。さっき言ってた『オプション』ってなんのことだ？」
「あ〜、あれね。あれはね、元々考えてた例のサブスクの追加機能のことだよ。例えば、追加で 100 円払ってくれたら彩人の分も弁当用意してくるとかね」
「なるほど、それは良いな。ぜひお願いしよう」
「おっ、気前がいいね〜！　じゃあ、明日から楽しみにしててね」

　月 100 円で、昼食が紬の手料理に変わるなら、これくらいは喜んで払わせてもらう。財布を取り出し、そのまま 100 円玉を紬に手渡す。購買のパンは美味しいのだが、味がワンパターンで飽き始めてきた頃だ。

「あっ、そうだ。オプションは他にも色々取り揃えてあるから、ボクにして欲しいこと、ボクとしたいことがあったら相談してね？」

「そうは言うけど、ただただお金が欲しいだけじゃないのか？」
「あははっ、バレた？」

———

「そういや、『恋人』関係になったけど、彩人から何もしてこないよね」
「うっ……」

　俺の部屋で、ベッドに座りながら二人並んでゲームに勤しんでいた時、雑談のノリで紬からそんなことを言われる。確かに紬と契約を結んでから早数週間、紬と一緒に昼食を取ったり、一緒に帰宅したりと、それっぽいことはやっていたが、どれも紬から誘われてしていたものであり、こちらからアクションを起こしたことは何一つとしてなかった。

「ああいや、それを責めるつもりはないんだ。彩人がそういうタイプのやつだってことは知ってたしね。けど、ちょっともったいないなと思ってさ」
「もったいない？」
「だって、彩人はボクにお金を払ってるんだよ。それなのに、『彼氏』としての権利を使わなくて良いのかなって」
「……」

　真面目な顔して、俺の『彼女』はなんてことを言うのだ。確かに、こちらはお金を払っているのだから、何かしても文句を言われる筋合いはない。俺だって思春期の男子高校生だ。こんなに可愛くてスタイルのいい女子が彼女だったら、やりたいことなんて山のようにある。けれど、こちらの行動が原因で紬に嫌われたら、それこそ最悪の展開だ。なんとしてもそれは避けなければならない。しかし、こちらからも普段のお礼を込めて何かしたい。う〜ん……よし。

「まあ、無理やりの契約だったし、彩人が嫌ならいつでも解約しても……わっ！」
「これが今の俺の精一杯だ。少しは『彼氏』らしい振る舞いができているかな」
「……うんっ、バッチリだよ！　やればできるじゃん！」

　結局、俺が取った選択は、紬に正面から抱きつくことだった。背中に手を回し、お互いの距

離がゼロになるまできつく抱きしめながら、首筋に顔を埋めて、なんとか言葉を紡ぐ。なんとか捻り出した行動であったが、彼女には好評だったようだ。

「ふふっ、一歩前進だね。褒めてあげるよ」
「あっ、こら撫でるなっ」
「彩人はそこでじっとしてれば良いからね」

紬は嬉しそうに、そして絶対に離さないと言う気持ちを表すかのようにきつく抱きしめ返してくる。今まで背中越しに感じていた大きな双丘が俺の胸板で潰れており、それに、自分の部屋に二人きりというプライベートな空間ということも相まって、本能を抑えることがかなり難しくなっている。あと一押しされたら、完全に本能に飲まれてしまうだろう。

「……頑張ったご褒美に、今なら特別オプションで、もう 500 円払ってくれたら、『ボクになんでも好きなことをしてもいい権利』をあげよう♡」
「なっ……はっ？」
「抱き合うのでも嬉しいけどさ、ボクとしてはもっとボクのことを求めて欲しいんだ♡ それに、こうして「お金を払った」っていう大義名分があれば、ちゃんと動いてくれるのは今証明できたからね♡」
「それは……そうだけど……」
「それでさ、するの？ しないの？」

紬は、楽しそうに尋ねながらこちらを見て微笑んでいる。しかし、その顔つきはいつものような元気が溢れ出ているものではなく、こちらを誘惑し、食ってしまおうと言わんばかりの蠱惑的な笑みだった。そんな魔性の笑みを向けられた俺は、まるで糸で操られるかのように首を縦に振った。

「は〜い、確かに 500 円頂戴しました♡ これで本格的にボクは彩人のものになったというわけだね♡ さあ、なんでも言っていいよ♡ 彩人がしたいことならどんなことでも叶えてあげるよ♡」

紬は、俺が差し出した 500 円玉をポケットにしまうと、こちらの言葉を今か今かと待ち構える。俺のベッドの上で、正座しながら手を広げるその姿は隙だらけで、本当になんでもできて

しまう危うさを含んでいた。

「その……何でもとは言ったけど、本当に『何でも』なんだよな？」
「ふふっ、何が気になっているかはよく分かんないけど、本当に何でもして良いんだよ」
「わかった。言質は取ったからな……それじゃあ、まずは胸を、触らせてくれ」
「うん、わかったよ♡」

　最悪嫌われても良い覚悟を胸に秘め、勇気を振り絞って言ったお願いだったが、紬の返答はこちらに比べると、かなりあっさりとしたものだった。あんまりにも即レスだったので、俺の処理能力が追いつかず、ぼ〜っとしていたところ、反応がないことを不満に思ったのか、紬は俺の手首を掴むと、そのまま胸に持っていき、両手を使って自分の胸に押し付けた。

「ほら、お望み通りのおっぱいだよ♡ 触った感想はどうかな？ なんなら、指動かしたって良いんだよ♡」
「うぉ……」

　押し付けられていた時から紬の大きな胸の感触は十分に感じ取っていたが、いざ自分から能動的に揉み始めるとその柔らかさに圧倒された。手のひらに収まらないほど大きな胸に、ゆっくり指を沈み込ませルト、指全体が今までに感じたことのないほどの快楽を感じる。

「あははっ、めっちゃ揉むじゃんっ♡ ずっと前からこ〜いうことしたかったんだ〜♡」
「んなっ……いや、そうだけどさ……」
「い〜んだよ♡ 彩人はボクの『彼氏』なんだし、許可もちゃんと出してるからさ♡ 満足いくまでしてて良いからね♡」

　無言でずっと紬の胸の柔らかさを堪能していると、その張本人からからかいの言葉が飛んでくる。しかし、その言葉には嫌がっているような感情は見られず、むしろ楽しんでいる様子すら伺える。

「ちょっと、彩人……♡ 揉み方、えっちになってるよ……♡ んっ♡ やっ、やめてっ♡ んんっ♡」

　ひとしきり紬の乳を堪能したあと、以前調べた女の子が気持ちよくなれる揉み方とやらを試してみると、紬には効果抜群だったみたいで声に艶が含まれ始めた。さらに、服の上からであ

るが乳首のあたりを指の腹でなぞると、紬はそれに合わせてビクッと身体を震わせる。こういうことをしたのは初めてだが、ここまで良い反応をもらえると、こちらとしても嬉しいものだ。

「ははっ、なんか楽しくなってきたわ」
「ちょっ……♡ 調子乗るなって……♡」

　そんな紬の様子を見て、さらに揉み込む手に力を込める。口では反撃するが、身体をくねくねとよじらせてなんとか快感に耐えているのが丸わかりだった。「口では反抗しているが身体は正直」という格言は本当なんだなと、妙に冷静だった頭で考えつつ、紬を責める手を激しくしていく。下乳に手を回し、掬うように揉み、じわじわいじめていた乳首は爪を引っ掛け、カリカリと快感をこそぎ取るような激しい責めを紬にぶつける。

「やっ♡ ほんとにっ♡ やめてってばっ♡ ちくびいじりもだめっ♡ いっちゃうっ♡♡ いっちゃっうってっ♡ あ、あやとっ♡ て、とめてっ♡」
「『なんでも』って言ったのは紬の方だろ？ そのまま快楽に飲まれちゃえって」
「んんっ♡ ふっ♡ ん〜っ♡」

　紬の言い分に対して無視を決め込み、耳元でわざと低めにした声――紬が以前好きだったと言っていた――を流し込んだ。それと同時に胸全体を責めていた手の早さを一段階上げ、彼女が溜めに溜めた快感を爆発させるのをアシストする。

「みみもとっ♡ それだめっ♡ ほんとにむりっ♡」
「強がるなって。別に我慢させてるわけではないんだし、イッてもいいんだぞ？」
「ちがっ♡ そういうのじゃっ……♡ んひっ♡ そこっ、ダメっ♡ あっ、つねらないでっ♡ ほんとむりっ♡ っっっ〜〜〜〜♡♡♡」

　必死に最後の抵抗を見せていた紬だったが、シャツの上からぷっくりと浮き彫りになった二つの小さな突起を親指と人差し指で強めに摘むと、紬の身体がまるで電流が走ったかのように大きく震えた。おそらく、しっかりと絶頂を迎えたのだろう。俺は、ぐったりとして崩れ落ちる紬の身体を支えながら、そんなことを考えていた。

5. 修学旅行で女子風呂覗きを密告したら、美少女３人と同じ部屋になった件。そのあと

　授業の終了を告げるチャイムが鳴る。６限の担当が担任の先生だったので、そのままホームルームも終わらせてくれたおかげですぐに帰れるのは本当に助かる。本日も無事に乗り切った。教室を見渡すと、他のクラスメイトも解放感をその身で堪能しているようだった。

「ゆ〜くんっ！　早く行こっ！」
「うおっ、早いね佐藤さん」
「む〜っ、『佐藤さん』じゃなくて『あ・り・す』でしょ〜！」
「あっ、ごめん。そうだよね、有栖」
「むふふ〜っ、それでいいのだよ」

　帰宅するために、教科書をバッグに詰めていると、先に準備を終わらせた佐藤さんが話しかけてくる。以前も言われた名前の件で少し不貞腐れてしまったが、ちゃんと下の名前で呼んで

あげたら、一気に満面の笑みを浮かべていた。そういうちょっとちょろいところも可愛い。

「二人とも、お疲れさま」
「おっ、ほのっちも来た。おっつ〜」
「お疲れ様」
「わっ、久遠くんすごっ。それ、こないだの小テストだよね。満点じゃん」
「えっ、あっ、ほんとだ。流石ゆ〜くんだねっ！」
「たまたまやったとこが出ただけだよ。それに船堀さんにたっぷり教えてもらったからね」
「それでもすごいのには変わらないって。わたし 80 点しか取れなかったよ」
「二人とも高すぎでしょ……アタシ半分も取れなかったけど……」

少し遅れてやってきた宮崎さんに机の上に残っていた小テストが見つかる。二人に言った通り、何と 100 点を取ることができたのだ。張っていたヤマが当たったのと、テスト前日に船堀さんにきっちり仕込まれたおかげだ。

「あら、あれだけ前日遊んでいて余裕たっぷりだったのにね」
「げっ……は〜ちゃん……だってしょうがないじゃん。わかんないものはわかんないんだもん」
「まあまあ、しっかり復習すれば本番は大丈夫だって」
「うぅ……ありがとほのっち……」
「穂乃果も甘やかさないの……はぁ、今日はそれの復習かしらね」

そんなテストの話をしていると、船堀さんも準備を終え、スクールバックを携えてやってきた。そうして始まるいつもの流れ。これをこんな至近距離で見られるだけで、1 日の疲れなど吹っ飛ぶものだ。可愛い女の子が話しているだけの姿を見るだけで、こんなに元気になれるなんて、やっぱり男の身体は単純だ。

「おっ、そうだそうだ！ こんなことしてる場合じゃなかった！ 今日はゆ〜くんちでテスト勉強だもんね！ は〜ちゃんも来たし、さっさと行こっ！」

四人で二列に並びながら、自宅までの道を歩く。男子一人女子三人という集団はそれなりに

目立つようで、僕たちと同じように帰宅途中の学生にめちゃくちゃ見られてしまう。修学旅行後は慣れない視線に戸惑ったこともあったが、今ではもうあまり気にしなくなった。気にしてもどうせこの状況は変わらないことに気がついたからだ。

「あっ、ねぇねぇ、コンビニ寄っていい？ アタシジュース買いたい！」
「わたしも飲み物買いたいな」
「わかった。ちょうどそこにあるし、行って来なよ」

　目の前のコンビニを指差し、佐藤さんと宮崎さんに促す。二人は行ってくると僕たちに声をかけると、コンビニの自動ドア目掛けて駆け出していった。

「船堀さんはよかったの？」
「ええ、家から持ってきたお茶もまだ残っているし、実を言うとあんまりお金の余裕がないの」
「あっ、そうなんだね。ちょっと意外かも。そういうのしっかりしてるイメージだったからさ」
「最近読み始めた小説が面白くて、その作者のものを一気買いしてしまったのよ」
「へ〜、そうなんだ。船堀さんがそこまで言うなんて、その人の小説って相当面白いんだね」
「今度貸しましょうか？」
「えっ、いいの？」
「ええもちろん。好きな人と好きなものを共有できる楽しみは何にも変え難いものだから」

　そう言ってこちらを見て微笑む船堀さんは、何だかとっても可愛くて、今すぐにでも抱きついてしまいたいような雰囲気を漂わせていた。

「あーっ！ ゆ〜くんとは〜ちゃんがなんかいい雰囲気になってる！ ずるい〜！ アタシも混ぜろ〜！」
「抜け駆けは良くないよ遥ちゃん」
「ちょっ、二人ともっ！ 別にそんなんじゃ……」

　だが、お互いに何か行動を起こす前に、佐藤さんと宮崎さんが買い物から戻ってきた。慌てて伸びかけていた手を引っ込めて、そのまま二人の方へ向き直った。

「せっかくお菓子とか買って来たのに、二人がそんなんじゃ、あげたくなくなっちゃうなぁ」
「これは私たちにも何かしてもらわないとね」
「そうだよね。と言うわけで、ゆ〜くん？ 今日はわかってるよね？」

　船堀さんが追求される流れかと思ったが、その矛先が急にこちらに向いてきた。しかも、こちらを向いてニヤリと笑う佐藤さんに背筋に寒いものが走るのを感じる。周りを見ても宮崎さんはニコニコ笑顔のままでどこか怖いものを感じるし、船堀さんも僕と同じものを感じ取ったのかあわあわとその場に立ち尽くしていた。

「ま、こんなところで話すのも何だしさ。さっさとゆ〜くんち行こう！」
「あ、ああ……」
「遥ちゃんも、ぼーっとしてないでさ、行こ？」
「え、ええ……」

　かくして、僕たち四人のテスト勉強はこんな感じで、どこか不穏な雰囲気を漂わせたまま始まるのだった。

「ゆ〜くん、ここどうやるの？」
「あ〜、えっとね、それはこれをこうして……」
「あっ、そっか！　なるほどね！」
「遥ちゃん、数学の範囲ってどこからどこまでだっけ？」
「数学なら教科書の 160 ページから 182 ページまでだったはずよ」

　あれから僕の家に直行して、現在は二時間ほど経った頃合いである。コンビニであれだけ何かありそうな様子だったが、家につくと二人とも特に何もすることなくテスト勉強を始め、船堀さんと二人で肩透かしを食らった気分だった。

「う〜、疲れた〜！」
「うわっ、結構集中してたみたいだね〜」
「流石にちょっと疲れたわ」

　でも、そんな真面目な時間は、大きく伸びをしながら声を出した佐藤さんによって終わりを告げる。みんな集中してやっていたからか、表情には疲労の色が見える。

「たくさん勉強した時には、やっぱり甘いものだよね」
「こ〜いうこともあると思って、ちゃんと買っておいたんだよ〜」

　ガサガサとレジ袋を漁り、机の上に並べたのは、チョコレートやキャラメルなど、甘いお菓子たちだった。どうぞ食べてくれと手で促されたので、ありがたくいただくことにする。

「ふふふ、さっき買ったのはお菓子だけじゃないんだよ♡」
「えっ？」
「じゃじゃ〜ん！ 確かこないだ無くなったって言ってたもんね〜♥ 」

　そう言って取り出したものは、赤い下地に大きな白文字で「0.01 ミリ」と書かれた手のひらサイズの箱だった。それは僕たちにとってもう見慣れたもので、当然使用用途も理解している。

「今日はちゃんと頑張ったし、ご褒美があってもいいよね♥ 」
「それに、遥ちゃんにはさっきのお仕置きもしないといけないしさ。ちなみに拒否権はないよ。久遠くんもそれでいいよね？♡」

　いいよね？と言われているが、目が全く笑っていない。反対意見を一切言わせない無言の圧力を感じて、僕は首を縦に振るしかなかった。

「えへへっ、それじゃあやろっか♡」
「ちょっ、穂乃果っ、これ外しなさいよっ！」
「だ〜めっ、これは一人で抜け駆けしようとしたことへのお仕置きなんだから、遥ちゃんはそこで大人しくしててね♡」

　宮崎さんは僕がしていたネクタイを外して、船堀さんの腕をベッドの足に括り付けて、動けないようにしていた。彼女を助けるために僕が手を伸ばそうとしたところ、佐藤さんにその腕を掴まれる。

「だ〜めっ、ゆ〜くんはこっち♥　アタシの相手をしてね♥ 」
「うわっ！」

　そうしてベッドに座らされ、船堀さんの左で彼女を見下ろす体勢になった。佐藤さんはそのまま僕の後ろに座ると、自分の足を僕の足に絡め、ガバッと開いて僕が動けないように押さえつけた。

「へへっ、こうしたらもう逃げられないぞ♥　ゆ〜くんはここでは〜ちゃんがほのっちにめちゃくちゃにされてるところを見ててね♥　というわけで、ほのっちよろしく♥ 」
「は〜い♡ それじゃあ遥ちゃん。服脱ごっかっ♡」
「やっ♡ ダメっ♡」

　宮崎さんは身動きの取れない船堀さんに跨ると、ぷちぷちとゆっくり制服のボタンを外し始めた。はだけた制服の隙間から下着が見える。

「あはっ♡ やっぱり言ってた通りの色の下着なんだね♡ ほらほら久遠くん見てよ♡ 遥ちゃん、結構えっちなの着てる♡」

　宮崎さんが指摘したように、船堀さんは黒いレースの下着を着ていた。僕のためにそんな下着を着てくれたんだと考えると、胸が熱くなるのを感じる。

「べ、別にいいじゃないっ♡ 私がこういうの着たって♡」
「ん〜、悪いなんて一言も言ってないよ♡ ちょっとびっくりしただけ♡ それにほら、久遠くんも喜んでるみたいだし、よかったね♡」
「うえっ！」

　二人のやり取りに意識を向けていたら、気がつかない間にズボンのチャックが開けられ、そこからペニスを取り出されていた。僕のペニスはもう準備万端と言わんばかりにガッチガチに勃起しており、その勇ましい姿を三人に見せつけていた。

「ゆ〜くんは、は〜ちゃんがこ〜いうの来てくれるの嬉しい？♥ 」
「ま、まあそりゃね」
「ふんふん、こんなにバキバキに勃起してるし、嘘じゃなさそうだね♥ 」

　佐藤さんは後ろからペニスを握り、シコシコと上下に動かし始める。その手つきは手慣れたもので、僕の弱点を的確に僕が一番気持ち良くなれる力加減で責めてくれる。
　一方、目の前では宮崎さんと船堀さんの乳繰り合いが始まろうとしていた。

「えへへっ、今の遥ちゃんすっごく可愛い♡ このまま食べちゃいたいくらいだよ♡」
「穂乃果っ！？♡ ちょっとっ♡ んんっ♡」
「うわっ、穂乃果のキスえっぐぅ〜っ♥　めっちゃ舌絡ませてるじゃんっ♥　ねねっゆ〜くん♥　あれ、私から見てすっごくえっちだと思うんだけど、ゆ〜くんはどう思う？♥ 」
「すごいね……」

　目の前で激しいディープキスを始めた二人を横目に、僕は佐藤さんに囁き手コキをされる。こんな濃密な光景を目の前にして、さらに快感を貪ることができるとは、やはり相当恵まれた環境にいることを再認識する。

「んむっ♡ んんっ♡ んちゅっ♡ えとろっ♡ れろろっ♡ ぷはっ♡」
「ほ、ほのかっ♡ やめっ♡ ふむっ！♡」
「えー？♡ 本当はもっとしてほしいんじゃないの？♡ ここだって、すっごく濡れちゃってるよ♡」
「やっ♡ あっ♡ だめっ♡ んんっ♡」

　宮崎さんの責めは止まることを知らない。キスから船堀さんを解放したかと思ったら、今度はスカートの中に手を入れて、そのままくちゅくちゅと水音を響かせ始めた。おそらくは、指を船堀さんのおマンコに突っ込んでかき回しているのだろう。初めは抵抗していた船堀さんも、だんだんとその動きが弱まって、艶っぽい声が漏れるようになっていった。

「ねえ、ゆ〜くん？♥　女の子同士のキャットファイトを間近で眺めながら、それをオカズに別の女の子に手コキさせる気分はいかがかな？♥ 」
「う、うん……すっごく気持ちいいよ……！」
「あはっ♥　それはよかった♥　好評みたいだし、ほのっち、そのままもっと責めちゃって♥ 」
「は〜い♡ ……さて、遥ちゃん？♡ 私ね、今、左手が空いてるんだ♡ この手を……おっぱいに持っていってあげるね♡ 遥ちゃんの大好きな乳首責め、いっぱいしてあげるよ♡」
「やっ♡ ちょっ♡」

　宮崎さんは船堀さんのブラジャーをずらし、その中にあった乳首を外に出すと、その乳首を

指先で摘んで、くりくりと弄り始めた。指先が動くたびに身体をビクビク震わせていた。
顔を赤くし、気持ち良くなっているのが丸わかりの表情を浮かべているのを見て僕もどんどん興奮していった。

「ん〜？♥　ゆ〜くんも乳首責めされたいの〜？♥　いいよ〜♥　アタシに任せて♥　それじゃ、失礼しますね〜♥ 」
「ひゃっ！」

　僕の返事をハナから求めていないかのように、自分一人で即断即決した佐藤さんは、僕の Y シャツの胸の辺りのボタンを数個外すと、そこから直接手を差し入れてきた。彼女の柔らかい指が胸を這う。それがどうにもくすぐったくて声が出てしまう。

「ふふっ♥　変な声出てる♥　まだ手を入れただけだよ♥　まあでも、ゆ〜くんって手コキしたらすぐに射精したくなっちゃうし、そこに乳首責めが合わさったら、我慢なんてできないか♥ 」

　性癖や弱点なんかは全て把握済みな相手に勝てるはずもなく、手コキをする時には指輪っかを作って、カリ首のあたりを集中して責めたり、乳首責めと手コキのペースを揃えたりと、僕の好きな責め方を的確にしてくれる佐藤さんには頭が上がりそうもない。

「あっ♡ 久遠くんもすっごく気持ちよさそうにしてる♡ もう射精しちゃうかもね♡ 遥ちゃんも一回イっとこっか♡」
「あっ、ちょっ♡ んんっ♡」

　向こう側では宮崎さんが責めのギアを一段階あげたようだ。船堀さんのおマンコと乳首をいじる手はそのままに、残っていた右の乳首に口を寄せてしゃぶりつくことで、三点責めを開始したのだ。船堀さんは慌てて口を塞ぐが、そこからは嬌声が漏れ続け、この様子だとすぐに絶頂を迎えてしまいそうだ。

「おっしゃ、ゆ〜くんも一回イっとこイっとこ♥　こっちも本気で搾り取ってあげるから覚悟するんだよ〜♥ 」

　と、向こうの二人の様子を観察していたところ、意識を引き戻すかのように耳に声が流し込まれ、次の瞬間には強烈な快楽が全身を駆け巡った。自分の身体に視線を落とすと、下着の上

から親指と中指で乳輪を押し広げられ、強調された乳首を人差し指で素早く擦られていた。当然手コキのスピードもそれと同じになっており、納得のいくものであった。

「お〜お〜、歯食いしばっちゃってまあ♥　そんなに気持ちいいの♥　気持ちいいんだよね♥　それじゃ、カウントダウンしてあげるから、その間だけ頑張って耐えよっか♥ 」
「おっ、いいね♡ じゃあ遥ちゃんも、カウントダウンが終わるまで、頑張って我慢しようね♡ 途中でイッたら、もっとすごいお仕置きしちゃうからね♡」

　二人の宣言に僕と船堀さんは同時に息を呑む。カウントダウンが終われば射精してもいいということは、逆に捉えると、宮崎さんが言うようにそれまでは絶対にイってはいけないということだ。これが本当に辛い。我慢した先に幸せがあると分かっていても、快楽というものは我慢するのが非常に大変なのだ。

「それじゃあ、いくよ♥　ご〜っ♥　一番気持ちいい射精ができるように、もっと早くシコシコしてあげるよ♥　けど、気持ち良すぎてカウントダウンが終わる前にぴゅっぴゅしちゃだめだからね♥ 」
「よ〜んっ♡ へへっ♡ 遥ちゃんもちゃんと我慢するんだよ♡ ま、責める手は全く止めるつもりはないけどね♡」
「さ〜んっ♥　は〜ちゃんも結構辛そうだよ♥　でも頑張って耐えてるね♥　男の子として、女の子にカッコ悪い姿は見せられないよね？♥　うんうん、だよね♥　だったらどうするかわかるよね？♥ 」
「に〜いっ♡ あとちょっとだよ♡ 二人とも頑張って♡ わたしの手とか握ってもいいからさ、なんとか耐えてね♡」
「い〜ちっ♥　もう少し♥　あと一つカウントが進めばゴールだよ♥　ここが勝負所だ♥　ファイトだよ♥ 」

「「ぜろっ♡♥ 」」

「いっくっぅぅ〜〜っっ♡♡♡」
ぶぴゅるるるっ♡♡ びゅるるるるっ♡♡ ぴゅるるるっ♡♡♡

　二人の最後の合図と共に、僕はペニスの先っぽからドロドロになった白濁精液を佐藤さんの手の中に吐き出し、船堀さんは身体を一際大きく跳ねさせ、透明な汁をカーペットの上に撒き散らしていた。お互いに同時に絶頂を迎えたようだ。

「わっ♥　相変わらずすごい量だね♥　手がベトベトだ〜っ♥ 」
「うあっ♡ 遥ちゃんすごっ♡ 顔にかかっちゃったっ♡」

　二人がそれぞれの反応を返すのを感じながら、僕は射精の疲れから身体をぐったりさせる。必然的に佐藤さんに身体を預けることになり、それに気がついた佐藤さんが気を効かせてくれて、後頭部を彼女の胸に乗せてくれた。

「およよっ♥　疲れちゃったん♥　そりゃこんだけたくさんザーメンだしたらそうなるか♥　いいよ♥　アタシのおっぱい枕に頭預けてゆっくりしてな♥　後片付けはこっちでやるからさ♥　ほのっちティッシュ取って」
「は〜いっ♡ 遥ちゃんもお疲れ様♡ ちょっと意地悪が過ぎたかな？♡ ごめんね♡」
「ほんと……もうちょっと、加減して欲しかったわ……」

　船堀さんも僕と同じように身体をぐったりさせて、息も絶え絶えになっているようだった。結構ハードな責めを食らっていたのだろう。

「お詫びと言ったらなんだけど、この後の久遠くんとのえっちは一番にやっていいからっさ♡ それで許して♡」
「え〜、いいなぁ♥　ゆ〜くんが回復したらアタシが一番にしようかと思っていたのに〜♥ 」
「ほら、こうでもしないと、この後遥ちゃんに何されるかわからないし……」
「へぇ……初めから仕返しを恐れていたのに、ああいうことをするのね」
「えっ！？ うそっ！ なんでもう動けっ、きゃあっ！ あははっ、ちょっ、くすぐるのっ、やめっ、あははっ！」
「今度は私の番よっ！」
「うわっ♥　ほのっち押し倒されちゃった♥　あれまぁ大変だ♥ 」